

祇園祭禮信仰記

○義輝公涉遊の場

狂言詞罷出たる者ハ九條の里の揚屋でる扱も室町の將軍足利十三代の武將從二位左大臣源の朝臣義輝公當所名代の天職花立花の君を根引有て初春の涉遊數々の中に今日ハ涉修法の護摩を移され此所よ於て阿彌陀の光とやす涉遊びを催はせられ候ふ間昵近の侍ひ達とうく涉前へ相詰られ早々涉遊を始め候へや々々々々々あら尊や大集月藏經より曰く解脱堅固を始め五々二千五百歳より到つて鬪爭堅固の時を指す大聖世尊の涉法の華光陰既に百七代正親町院の天業永祿八ツの太郎月始の八日ばさら事征夷大將軍源の義輝公設の壇を高座とし偏脫右肩合掌有り過帳箱よ諷誦文の夫よハ有ぬ阿彌陀の光闇取の帳押開き一々よ涉覽有り(義松)永大膳久秀豆腐を買に往たかいやい(松)ア涉前よ

い(義)ハ、故三好入道長慶が嫡子修理太夫存保黒木の柴を買たかやい
 (修)ハ、涉前い(義)ハ、出來たくシテ花立花ハ何ぢやく(花)アイと會釋し雷
 益よ刷匙添て貴鳥の未だ乳臭い了鬟の辰彌形相應を貝杓子引舟虔婆
 が荷ふて來た一ツ土竈釜の蓋二ツ引き兩大紋日今日の涉遊の數の物
 捕ふハ君が涉威勢ぞ皆万歳を唱げり揚屋の亭主ハ越路の城主淺倉
 義景兩手よとさん燭鍋のつるくと持て出(景)何方もくお早い來臨
 涉大將輝大臣様にハア差詰阿彌陀ハ錢程曲輪の沙汰もお金次第格の
 古い趣向でもお役人が皆歴々四十八ぐわん數に合せ夫々の買物役不
 相應あがお慰み蓮華の間のお座敷で率涉酒宴と勧むれべ(松)實よもく
 此松永も然思ふ所物よ堅い三好殿も闇よ當つてハ否應あらぬ柴薪我
 等ハ又姥が豆腐角の取たお饗應料理の加減塩梅ハ花立花の君よ任せ
 お相伴よ参らんと獎し立てたる僕人の舌打仕たる酒宴の興甚だ機嫌

も義輝公欣然と打笑玉ひ(義)松永と云ひ三好と云ひ淺倉義景何方も一
國一城の大名花立花も諸共に似合ぬ役目^{イハ}はや如何も云ぬ趣向大膳
出來し大膳^{でか} 今日の花みへ何か遣ふあゝ夫よく足利累代小袖の鎧
寶藏第一の寶あれ共豫て汝が所望すれバ鎧へ大膳^{おほ}み取するぞ』と酒が
云する寛闊大盡松永はツと手を支かへ(大宣加至極の湯賀物)と義景と
目と目を合せ大闊取の數崩^{かずそろ}ふ上へ傍座^{あらた}を改め賑しく酒宴せん』と勧れ
バ(義)、如何みもく 花立花もサ奥へと傍坐を立んとし玉へバ三好存
保暫しと止め(修)昨日繪合の扇判者は則ち傍母君慶壽院様の傍方へ遣
されたる扇侍婢の小雪晚刻持て参るべし暫く是より待有て傍覽も且
へお感み』とヤ上る折こそ有れか使ざふと披露させ入来る使者へ振袖
の小雪と云て繪の事へ雪舟が孫娘花立花が妹女と云ねど白き姫瓜の
顔と顔とを見合て傍前間近く跪躍る義輝傍覽じ(義)、能く母の慶

壽院より生得繪を好給ふ故昵近の面々も吩咐繪合せと号け思ひく
の好み任せ筆へ狩野助直信判者ハ母人何方の扇が涉意入しが勝負
を聞も一興早うナセ」と渉錠の下うと取出す扇二本渉傍より差置ば頗て
取上げ見給ふ五重の塔より雪解の東が軒を傳ふ風情又一本ハ優美も
紫震殿の階の下立花の花の稍折取る姿を描きたるハ如何ある心の主
ハ誰が仔細ぞ有んと渉不審顔修理太夫ハ二本の内心より覺え松永も詮
議シ又扇の二人が顔小雪ハ見ぬ振知ぬ振修シ渉不審ハ渉道理何れ劣ぬ
渉趣向の中より二本の此摸様懸よ寄たる判じ物解る雪と春の雪春の
雪とハ直より小雪砂地より東へ惚ると云下心繪合を幸ひ小雪より心有者
の所爲あらん又立花も多き中より大内の庭を描しハ下様ならぬ右近の
立花是より及ぬ戀故より手を空ふすると解たるが小雪が姉の花立花今で
ハ義輝の寵愛豈工夫でも有まじ誰よりもせよ扇より主の名より無れど描人

ハ狩野直信殿慶壽院様のお傍へ召し奉尋み是非無く其主ノを聞し
召武士の家でハ斯様ある事屹度糺すが政道の第一小雪こりや其方が心
得よて二人の衆へ渡し詮議も密々傍合點か」と二本の扇押帖み松永三
好が手よ渡せバ面々名指浪風も扇も納る要と工合花立花も打笑て(花)
傍母君の傍近ふお宮仕への程有てお使兼の發明さ煩懊さふあ云開き
ア久振で顔を見て嬉ふござると姉妹が手を取交す親身同士義輝公も
小雪が利發感ずる餘り近く召れ(義)姉花櫻を身請して向後傍臺よ定る
上は其妹の和女あれバ姫と云ふ名を付換へて雪姫と呼からハ慶壽院
も外あらず大切み思されん此旨歸てア上よ(雪)お有難や」と手を支へ(雪)
お暇ナ姉上様又重て」と立上れバ(花)妹女然バ」と見送りの辭儀も作法も
武家馴し室町指て立歸る引違へて出来る奏者(奏)小田上總介信長參上
あり」と相述る(義)何信長が來りしとハ年頭の禮でがる、花櫻バ先奥へ禮

義正しき信長此体このてを見られな」と臺の物取片付大將始め人々も俄々威儀を搔繕ひ待間程無く式臺よ長袴の裙徐々と大紋の袖搔合せ手を拱いて打通り(信)卑臣信長年始の渉賀を祝し尊顔を拜し奉つりしと退つて敬ふ禮義の程義輝打領首せ玉ひ(義珍)しや信長扱も今川の大敵一戦又討勝たる注進早速獻聞よ達し勳功の恩賞として二品上總の太守よ補せらし間彌々忠勤勵むべし(信)忝(かたじ)けき渉詫やひ爾手剛き今川が首取たるも全く將軍の渉武運に因てなり斯る喜悅の折柄興を添奉つらん」と式臺よ打向ひ(信)用意の物疾(ごく)の聲も彌の拍子取曳さらばへと引綱の端女郎が美花姿四季の草木の花車籠花生を花々敷渉目通りよ引据させ(信)皆々太儀(たいぎ)と追歸し(信)遊里ハ風流異様を以て鬱溝(うつたい)を晴さず籠よハ佳香名酒を調へたり何方も一獻勧め給るべし」と言上有れバ松永大膳(松)是ハ思ひ寄ぬ渉作意如何よもく「チ披露致さん」と義景

が立掛り花引退る籠の中酒も銚子もあら笑止や足利重代小袖の鎧
如何よくと驚く計に呆れ居る大將大きよ急せ玉ひ(義)如何に信長是
こそ傳へる先祖の鎧如何成る事よて手よ入たる仔細聞ん」と傍氣色謬
れば些とも動せず(信)傍不審ハ傍道理昨夜禁庭より歸る所室町の傍所
裏門通り鎧櫃を背負ひ逃來る曲者何者ぞよ咎めたる聲に驚き櫃を
捨て逃失たり蓋を開けば此傍着長折社直よ傍所へと存ずれ共夜
陰とゆし傍所中の騒ぎも如何君ハ當所よ在ませバ斯く出來持參せし
も世の人口を憚り穩便よ致さん我寸志傍先祖尊氏公傍運を開き玉ひ
し鎧疎忽ス成玉ふ可からず國よ盜人家よ鼠殘り多きは夜前の盜賊取
逃したる殘念や」と松永を尻目に懸け一目よ見抜く英雄の眼を覆ふ淺
倉義景(義)信長や譯へ聞えたが斯程の盜賊取逃したと計りでは詮議
が残つて何とやら異ある物(信)ハチたゞぞ盜賊を取逃せバ詮議が残つて異ある物と

へな(義)奪ひ返したとの云譯が氣ぶさいく證據が無くてハ君の疑
ひ何時迄も」と云せも立ず膝立直し(信)兩執權を指置て一はな立て支へ
るからハ却つて詮議ハ和主又懸る(義)義景よ詮議とハ何を證跡云へ
聞ん(信)ハ、乞引出してお目又懸ふか者共参れ」はつと答て近習の武士
見て出でたる鎧櫃信長頗て立掛り蓋押明て引出す死骸大膳が悦顔淺
倉が愕然敗亡(信)何と涉兩所水責又掛白狀の上思ひの外脆ひ奴とつく
りと見られしあ」と取納め徐々と涉前よ向ひ(信)某しひ明日歸國爰へ遊
里の入込所渉沙汰ハ渉所へ還御の後松永殿三好殿万事用心肝要ア」と
夫とハ知ど此場の是非是ハ是ありけり緋絨の鎧も納る年始の禮齋齶
ふたる義景が手持不沙汰を三好が目禮苦笑ひして大膳が勧め廓の大
驪彌陀の光ハ四十八上總の太守信長が始終を土産又歸國有る明智の
程こそ(三重)類ひ無き

○祇園下河原の場

祇の園感神院の鳥居筋下河原の片蔭かたかげと歌古考かんこうと看板かんばんも女の手業てわざ嬪媚ひめい
た色紙短冊系しきせんじやくみよる物あら無くな我人の願ねがをさすが神子かみこならぬ神の
園生そのふみ住すみバ迎むかお園そのへくと名も高し往來いきの老若立集たちゆうひ皆みな評判ひやのお園そのへが
店占かせうらなふて貰もらふかい」と簾すだれを上あて皆みな未だ來こぬかア此短冊の假名見事かなみことぢ
や無いか器量きりょうも好歌よしも好こ公家様くわげの落胤おとしごぢやと區々ぞりぐ云ひひます」と云
ば傍そばから皆みな何なんのいの此廣ひろい世界ぢや物女の歌人かじんも無ふてはい此方こちら
娘むすめも此月このつきが産月うぶぢや男うぶを産うぶか女の子こか占うぶふて貰もらふ」と待問程まつまあく歩あゆ
み来る姿すがたも玄くつやんとかい玄くつよげよ赤前垂あかまへだれよ水手桶みずて茶店ちやな腰こしを持持もつの
歌古考かんこうの人立ひとたてを待まる、身より待人の意おもてを先まへ指掛さしかけし床几じゆうぎの先まよ行ため
バ(皆)ア己おれから」と引短冊ひきせんじやく(皆)コレ此歌讀よで下おされ(園)ア「とお園そのへが手てよ探さて」
あくよ何なんを種たねとの浮草うきくさの浪なみく生茂おほるらん此歌うたの意判じじて見

れば懷胎と見まするお子ハ姫傍前産も安ふムリます矣たがヨリヤ父無し
子と見まする(皆)アそりや又何して見まする(園)ア此五文字の時あくハ
時ぬのよと云ふ延假名親の許さぬ妹脊の談合誰が種とて浮草の浪の
うねく生茂るらん生ハ則ち生るゝ共読みまする何と左様でござん
玄よが(皆)ヨリヤ奇妙成程傍所へお末の奉公跡の月から戻た故とつくり
と吟味すりや去年四月葵祭りを見に往た時車の前後又押付られて主
ハ誰共白歯の娘疵物よなりましたと頭角兵衛又一人(皆)何様く己
も引て見よと此短冊ハ大江山(園)ア生野の道を遠ければまだ文も見ぬ
天の橋立貴方ハ付文と見まする人に人をぶ頼あされ折角心盡しても
まだ文も見ぬとムリます一度や二度で叶ぬ戀三度も五度も大江山生
野の道瀧の道隨分辛抱成れませ」と云ば皆々手を拍て(皆)玄たり扱も見
通しだや」と價を面々巾着の紐を解々散々み塵打拂ふ凌竈の床又人立

を待居たる折柄來る伏面頭巾浪人めけ共鱗有る男往來の噂聞傳へ菱
賛の先み立止り(侍)某しハ遠國浪人此程當所へ罷登りしが債ハ花の都
人優風流ある歌古考願の筋も有あれバそと占ふておくりやれ』と引短
冊ハ百人一首園』朝ばらけ宇治の川霧たえど ゆ顯ハれ渡るぜいの網
代木(ア)涉浪人の願とハ必定立身出世の事夫ハ好歌で涉座ります(侍)よ
成程出世を望む某しユ好歌と云其仔細何ぢや聞たい』と云内より(園)ア
今迄お前の身の上も川霧や山の霞が隔りて有付も無りしが顯れ渡る
と云所が則ち涉立身の網代木で涉座りますお目出度や』と答へける
(侍)扱う宣吉左右を承まへつて祝着致す謝禮ハ屹度出世の後是は當座
の席料と紙入搜して豆板の露白紙の引捨を中へ投込む折も折非人共
が口々よ(非)やしく 旦那く此間ハマケツから結構ある金を我ふへ』と云ふ口
押へて(侍)ヨリヤ音高し是へくと聲を潜め(侍)見る通り浪人の身分として

分よ過ぎたる貢金を遣たれ我達よ頼み度事有る故さ必定頼れて呉る
 所存か(非)ア否も何が扱くお侍ひ様のお亥やる事と云ひお金を戴い
 た冥加非人相應の事なら何あり共仰やりませナヨリヤ牛よ次郎よ(非)ア太
 郎や八が云通り命でも指上ませう(侍)ア頼母しくヤ外の儀でも無い
 ヨリヤ耳よとせき合点か假令狼藉をしたり追高が汝達那方も神へ詣の道
 脅爾あ事も有まいヨリヤ頼の證と紙入より取出し手よ渡せバ各々が各手
 よ押戴き(非)又一角仙人様ヨリヤ有難いと戴く所へ先退げくの先拂ひ先
 將軍家の傍母君傍參詣の下向道片寄りませいと行過る此方も點頭非
 人同士簾の内よも菊水の邊よ暫し窺へんと謀し合て行空やお園も店
 を取片付茶店を指て出て行鳥居通りを徐々と一際自立物詣バ將軍義
 輝公の傍母公慶壽院孫君の輝若丸乳母の侍従が傍供よ外珍しき侍婢
 達空も晴着に留伽羅や梅が香深き染小袖室町様と賞賛す下川原よ

休慰玉ふ同じ道筋回如の南都一乘院の慶覺法師夫を見るより笠取て立寄玉へバ輝若君若_レ伯父様と指差して一禮有れば(覺)是へく涉母公甥の輝若誘引て徳日の參詣あらめ我等も今朝奈良を出只今當社へ法施を参らせ直_シ室町へ立寄ん志盧(慶)、珍_シの慶覺や互_シよ息才で嬉_シふ涉座る自らも下向の道率室町へ同道し道すがら何かの事物語らん」と宣ふ内侍從が見遣る向ふの方(從那方)へ見えるハ信長殿の館印祇園様へ參詣で涉座りませうとやす内より下馬前を馬上よ飄りと小田信長花麗の大紋長袴裾の衣紋も用捨無涉前よ烏帽子を摺付(信)將軍家の涉母公歩行よりの涉物詣早涉下向しあ慶覺公よハ一別以來先ハ涉堅勝の体恐悦至極と平伏有れば(覺)是へく斯遁世の慶覺久々南都よ所住すれバ穩便ハ互の事シ信長にハ在京でも召れしか(信)ア仰の如く年始の參内仕つり室町の涉所義輝公へ謁し奉つり涉暇ヤ上只今歸國の

旅立途中乍ら慶覺公へ逢奉つるハ幸ひの悦び添けあくも武家の棟梁
義輝公の後舍弟信長が口又懸す上るハ恐乍ら何卒涉還俗有て未だ幼
稚よ在します輝若君の後見共成玉へい礎より礎を重ね禁庭の御守護
此上やいべきと云せも敢ず(覺)ア信長此慶覺に還俗せよとハ逆も沙門
ハ遂まじと墮落破戒を勧むるよる益あき事よ耳を汚したり悔しや」と
珠數事々敷空嘯いてお在ます、信長へ返答も指倚向て母尼公始終を篤
と聞し召(母)イヤ嘯慶覺然のみあ腹を立られず信長又代つて此母が大畧
を云ひ聞さふ情亦や兄義輝花橘が色よ溺れ天下の政道も自然と懈怠
三好存保环折々の諫言も空吹風花橘ハ松永が妹將軍の小舅环と威を
震はせ我意又任する邪の政道を餘所よ見る其悲しさ其所を察して信長
の還俗を勧るも家國の爲輝若が行末思ふ忠の道渉身も天下よ二人の
兄弟室町へ来て俱々よ諫言やて下され」と後目よ涙持乍ら聲へ疊らぬ

十寸鏡寫る浮世を思ひ草萎れ入たる涉風情侍従も若の手を取て慶覺
の傍近く侍世界廣しとナセ共一人の甥君一人の伯父君還俗を遊ばず
科で阿鼻地獄の苦み受ると思召御後見有る様よ俱々お頬遊びせ」と教
ゆれば指寄て(若)伯父様往で下さりまするお父様や祖母様と一所に居
て下さりませ」と廻らぬ舌よ手を突て禮儀ハ乳母が育がら慶覺も良暫
し默然として在せしが(覺)母君の仰信長の勧め一々道理よ當ッたり兄
親よ向つて諫言ナ程の事ハ逆縁なれ共善を勧惡を懲す出家の役率
御供と立玉ヘバ涉母君ハ信長よ向ひ(母)必ず歸國召る共都の事を頼む
シや取分大事ニ掛奉つる神聖の涉箱吉野殿より歸り玉ひて又禁庭へ
送る迄ハ一大事の預り物ニシヨハ此輝若我ハ年老翌日知ず只何事も
宜様よ」と(慶)遣ハせし薙刀爰へく」と手に探寄せ慶此ハ是三條小鍛治
鍛てる薙刀信長歸國の土産共又ハ頬の證づ」と渡玉ヘバ押戴き(信)ハ

何よりの浮賜物有難しく假令遠國と隔たる共忠臣の魂ひハ浮傍
ま屹度守護致さんか然ば(慶)然バ輝若おぢやと絲遊よ春めく野邊の草
踏分け室町指て歸るゝ跡見送りて信長ハ拳を握り牙を噛(信)ニ、憎き松
永殘多いハ慶覺浮坊追付て今一度ア、イ、イ、何をいふても那片意地一應
でハ得心有じ先々歸國を急がんず蘭丸來れ」と供人引具し宮居よ掛る
道傍へ以前の非人がのツカ(非)アお歴々のお大名合力取して下さ
りませ浮大身の浮參詣疾から圍ふて居りました」と大道一ぱい道を塞
いで邪魔すれば森蘭丸聲を懸(蘭)ナ貴人の前とも憚からぬ慮外奴退れ
下れ」と云ふ程摺寄り手を出して追ひつこい此蠅共切て吳んず身構
を信長制して(信)鹿忽あせび神前と云ひ血をあやすハ神慮の恐其儘來
れと往先よ非(合)力せずバ通する」と横よ轉々消炭俵手ざしも成す供先
も倦飽果たる其所へ走よ走つて彼浪人抜手も見せぬ抜打よ非人を残

らず切捨く頭巾引脱土よ手を突(九)我等山口九郎二郎とやす浪人小
田信長公よ向つて浪藉働く非人めら傍覧の如く切留ていへば最早寛
々御開きと退つてやせば打點頭(信)山口九郎次郎殿とやら此信長を能
知て難儀を救ひ下さる段喜ばし然乍ら社參の道筋血を見るへ快よが
らず是より空く立歸らんと引返す袂よ縋り(九)イヤ神拜の路次よ於て
血をあやせしハ我等が誤りヤ譯の切腹アと刀逆手よ取直すを(信)て聊
爾有な」と抑止め(信)信長故の生害餘所よ見て在れふか扱々驚き入た刀
の手練天晴惜き武士生害止り信長よ奉公あらバ知行を以て恩を謝せ
ん(九)ハア有難き浮詞某しどても浪々の身出世を望む折よ幸ひ身命を
抛つて忠勤を盡し奉つらん(信)早速の得心満足く當座の所領千五
百石其上の立身ハ勳功よ因て沙汰せんず」と宣へバ頭を下げ(九)有難し
添けあしと己が智略の巧みて念あふ主從安堵の思ひ蘭丸も名對面以

後たがハ互たがひよくと約束なまこ固かみき神垣がきや祇園囃子ぱやし下河原下部しもべが振出ふりだす行列ぎらうがれ
よ連つれて歸國かき(三重)勇々いのいのしけれ

○室町御所の場

玉敷庭たまごひばりへ自然夏おのづからなつも涼しと夕顔の光る源氏の黃昏たそがれや夫めハ五條の軒端吹のせば爰ゑハ二條の室町又義輝公の奥涉殿晝夜ちよやを分わかぬ酒宴の興日おきひも闌たけなハと知しられけり。か傍女そばめ中なかが立集たちあつる中なかよも梅路ひめぢが(梅)皆みなの衆じゆう如何いかよ涉臺みだい様ようがござらぬ。逆傾城の花橘はなくろを引上ひんじょう新御臺成しんごだいせいの御祝儀ごしゆぎとて悉しつ皆かい涉臺みだいハ揚屋あげや同然どうぜん皆みな松永殿まつながどのの差配さばいぢやげあ」と云いバ萩野はぎのが萩然はぎれんばいの慶壽院様けいじゅいんようのか侍婢じしょひ小雪女郎こゆめのらうハ花橘はなくろの妹大膳殿おほぜんどのが惚ほれ抜ぬいて付つ廻まわしつ爲つくれても雪姫ゆきひめハ下地したぢから狩野かのう介直信殿すなおのじと蕭然ぼうぜんの中うちぢやげあ直信殿じゆしんどのハ涉所せっしょ一番いちばんの美男ううぎあり繪ゑの名人弟子入仕いりしきたいと思おもたよ先越せんこれた」と同音うとうよ羨うらやみ咄ぱなしのさハめく中奥なかおくより出でる松永大膳髭ひげハ名なよ負おぶかま掛かけて(松)ア女子共こども何なんのらが

へき隙入るきりく「往」と呵付追立遣戸に窺ひ居る大膳が弟同名喜藤
太浅倉義景を伴ひ互^{たがい}よ默禮歩行より(喜)豫て仰付られし神靈の御箱愈
々今日暮を合圖某しが案内して是ある義景公へ(松)オ、其儀へ貴方と謀
し置た義景殿を同道して直に手渡し仕つれ又慶壽院と家の旗ハ斯様
くと囁き點頭(松)淺倉殿お頼みやすと慾惡非道の三鼎義景ハ笑を含
み(景)彼の御箱を受取なば拙者ハ直^すよ歸國せん跡宜ふ松永殿(松)何事も
今日中委細ハ跡から景合点と謀し合せて兩人ハ身を忍びて^か入にけ
る大膳ハ只獨心を凝す胸の闇斯とハ知ぬ狩野介小雪^よ思ひ寄るさへ
や晝も人目を忍草切戸の陰^よ身を潜め焦るゝ心の通じてや小雪ハ廊
下へつかくと歩行出たる出會がしら見より大膳(松)是ハく雪姫殿
明暮涉前よ詰て居ても和女ハ慶壽院のか側^{そば}よ成り言寄る傳手も無つ
た故此春の繪合せ惚抜て居る心の丈書て遣た扇の謎々ア其返事今聞

ましよ折節側よ人の無し逢た時又重つて玄ツぱり固める夫婦の結び
 否でも應でも女房みする」と毬摺付るべた濡を雪、是無休あマ放て(松)
 イヤ放さぬ寐て話す」と緊搦着たる淫猥しさ狩野介ハ堪り兼駆出る面
 相を見より姫が(雪)出まいか出れバ何かと喧しい出まい——と思ふ
 て居て遂爰へ出て此難儀と知す詞と目遣よ出も出られず鬱悶腹起きた
 り居たり身を蹴く此方も漸く振放し雪大膳様難有ふ義輝様の傍家老
 と肩を並ぶる人も無く下々の醜體あ事を傍制道も成る、傍身而して
 ニ姉の前のか分妾が爲よもア兄様其の前が妹を捕て(松)、其畜生
 合點もウ畜生ハ愚鷄鳥と云れても斯惚懸つたが因果連て徃て祝儀の伴
 相おぢや往ふと無理無体否と逃るを引止る後の障子又慶壽院細目
 よ明て見玉ふ共冷けし酒宴奥の間よ義輝公ハ聲高く(義松永ハ何方)云
 在る大膳——と召る、よ(大)、せんあ時の傍召ぢやとぶつくと云て

も詮方あく主と病瘡よ刀の鑑襍よ當つて跡ばつたり雪嬉や瘡へがさ
がつたと胸撫下す雪姫が側へつかく狩野介狩、惡ひ鬚面め出頭を
鼻よ懸け我儘働く大惡人討て捨る奴あれ共其方と己が懸中も天井が
抜け故出なと云やるよ心付じツと無念を堪へて居た雪サ妾も夫が苦
み成てヤヤし直信様疾から話さみやならぬ事逢バ嬉さ床しさに何を
云ふ間も無かりしが前も畫師の家あれば様子を聞いて坐んせう妾
が祖父様雪舟とて唐土へ迄お渡りなされ畫よ妙を得給ふとて明廷よ
り名劍一振給へりしを九利迦羅丸と名を付て父將監雪村迄秘藏して
待傳へしを河内の修驗寺岩上の瀧の元で何者やら父を殺し九利迦羅
丸を奪行しが男に無ければ家も立ず姉様ハ九條の里へ身を賣り母様
を育む内程無く病の床よ臥し女でこそ有らず共九利迦羅丸を手掛り
に父の敵を打て呉れ名劍を望からハ敵ハ武士と思へる心を付よと末

期の遺言悲さの日も立て此か館へ宮仕お前の器量よ泥た上馴て乍知る涉信實力と成て敵を討妾もお前の弟子と成し雪舟の家起して玉かれ」と恩と情を二筋よ涙ハ膝よ淵なせば直信も感じ入(直)オ女乍ら天晴く濃情く挨拶云々及ばず其望を聞上ハ我も父故法眼が畫師の冥加侍ひ冥利敵を聞出し助太刀せん繪空事と思ハれぞ」と親を誓の畫者同士約束冗ぬ極彩色妹育割無く見えよけり程無く奥の一間より慶壽院様お渡り」と披露の聲よシと慎み敬ひ出迎ふ慶壽院ハ涉愛子の慶覺法師を誘ひて徐々立出玉ふよもつまぐる珠數の涙の玉慶今日ハ五月十九日先涉代の命日輝若丸ハ姥の侍従と三好修理太夫存保を連菩提所へ詣しが片時離れぬ孫の輝若留守と思バ猶淋しい慶覺母を見舞と南都より當春都へ見えて後今日ハ往あふ明日ハ奈良へ歸ろとの鹿の鳴音を友として無常を感じする沙門の身を名残措さよ此母が一日く留

置て昨日今日の様あれぞ花の盛も散過て卯の花青葉杜鵑指屈バ早五
月打囃子歌連歌も同じ摸様ハ慰みあらず何があと思ふ付あれよ居る
二人の者ハ名有る畫師の子供あればかる書きを望で置た直信ハ竹雪
姫にハ松切てハ是を母が駆走サ用意ハ宜か早ふくと宣ふ内ツト二
人ハ取々慶覺のお側へ差出す繪絹引寄て打詠く(覺)天晴雪舟元信
が孫子にて有けるよな見事さよく直信が描きし竹を慶覺が南都ヘ
の土産よ貰ふぞと仰よ直信慎んで狩未熟ある狩野介及ばぬ筆ム汚せ
し繪絹渉賞美ハ有難しと一禮あせば母君松の繪絹を取上て二ツよさ
ツと引裂き玉ふ(雪)何故と雪姫が驚く顔ムハ目も懸す(慶)慶覺孟子
の母ハ織掛し絹を断ち我子を屬ます教とす此母も此の如く折角那雪
姫が心を盡した松の繪絹裂いた心を推して見や(慶)ム其本亂て未治ま
らず世の成行を思召慶覺よ還俗して亂る糸を結との渉志慮ハ厚けれ

共一旦佛の道より入浮世より歸る望へ無し」と破れし繪絹を引寄て竹より上
下の節有松より古今の色無しと雖も北洲の千年も遂よへ亡ぶ例との松
を裂たるお心へ(慶)は、夫りや互より云ぬ事ヨリ雪姫直信此裂た二ツの絹
其方達より取するが雪姫の狩野の介と師弟の契もせしと聞師匠の名字
を受續る弟子の名譽かる書の褒美より今より狩野の雪姫と呼からは
師弟中宜く何時迄も秘密を受つ直信も不便を懸よ」とつゞくよ二人
が譯を夫がどひ云での森の下露に濡し二人へ發と計赤らむ顔の丹精
の筆の縁と成りけり母君も涉機嫌能(慶)サア慶覽是から奥の佛間へ往て
輝若が下向を待ふヨリ雪姫直信其方達より赤云ひ聞す事が有此所へ來
よ」と打連て一間の内より入相の昨日へ里の花紅葉今日九重の涉所櫻盛
も未き輝若君三好修理太夫存保姥の侍従が付參らせ涉廟参の下向道
廊下口に差し窺ひ(姥)レ聞玉へ存保様松永殿の取持で涉代成のお目出

たと奥渋殿の賑しさ(修)然ばく正体も無き君の渋身持父長慶が數度
の諫も渋用ひ無剥さへ松永が催しの能の歸るさ父が俄の落命へ鳩毒
でも與へしかど心にハ含みながら部屋住の事なれバ實否も正さず暮
す内當春扇の繪合せ又大膳が我を招ぎ君渋寵愛の花橘何卒口説手よ
入よ然すれバ君も心付三好が不義ハ身の不義と里通ひを止り玉ハん
ヌヤ君の爲家の爲と勧めた詞よ打變り其傾城を館へ引入呑込ぬ彼奴が
心体何ハ兎も有れ那の傾城館よ置ねバ義輝公の渋身ハ安穩從^ま、左様
でござんす共お前ハ君の爲大事妾ハ此若君と母君様が猶大事豫て
渋聞有る通り妾しが親も往古ハ小知行も取た人浪人して國を立退津
國の住吉近所よござると聞を心便り万^{まことか}一の時ハと豫ての心得(修)、其
心体なら安堵せり」と互よ忠義の長話輝若君ハ精盡し若姥早ふ祖母様
の側へ行(従)、お待兼渋出と存保諸共打連て皆々奥へ入跡ハ暮を合圖

又松永喜藤太淺倉義景神聖の傍箱を小脇より抱へ藏の戸前を内から密
と差足抜足鼻息計り奥口見廻し點頭合ひ跡白浪の打連て足を計よ逃
歸る廊下を出る花桶微々風よ誘ひれて醉を醒しの千鳥足裾もほらう
く(花)ア松永様とした事がモ否々と云程面白がつて置て、阿陀意地の
悪いバ、何のからすが意地悪で、些醉を醒して來い己も其所へ行と
云て跡よ何して居さんすが、好ん末の松山浪へ越共殿様と妾が中へ
**、「機嫌上戸」と見みける斯と三好の存保ハ手燭を照し立出て瓦よ顔
を(花)三好様か(修)ア音高し橘殿」と云つゝ側よ躊躇寄り(修)、何時見ても美し
い美容と云ひ威高いも道理將軍の傍臺様三好づれがやた事をモ否々
傍酒機嫌で無い時よとツくりとか禮ナシふ(花)イヤナシ存保様假令醉て
も酒の醉本性ハ忘ぬヅツと何時やら仰しやつた事姿や實とハ思ハぬ
はいあ(修)ア戀ハ心の外でござる假令傍臺よ成ら玄やつても殿の心ハ

明日が知ぬ己よ靡ひて下さると連立て爰を立退き何様よも成る情の
道見付られたら夫限好返事を聞せてと云ふに怖氣の身も震へれ
(花)コレヤし妾ハ大分望の有る身逃亡も嫌死る事ハ猶嫌々修ナア斯迄心底
打明させ得心無とて濟さふか是非嫌あらば思案が有と迫合後方よ松
永大膳(松)浮臺様ハ何してムる我君是ヘ浮出と聞よ三好が打驚き手燭
吹消閨所へ突然差出す松永が(義)隠し持たる手燭の光不義者見付た動
くな」と聲荒らかよ義輝公おツ取刀よ立出玉へバ花孺ハ縋着(花)ノク情あ
いふ疑ひ大事のお前を袖にして何の寂しい外心と歎き誂るを振拂ひ
(義)ナ存保縛首討奴あれ共親長慶が忠義よ免じる身が手よ懸覺悟せよ」と
聞より存保立寄て(修)コレ殿親が忠義よ免じるとハ有難き浮詞然程忠孝
善惡を浮辨別ありあがら色よ溺れ酒よ長じ禁庭の守護天下の政務万
民の笑を思召れぬ浮放坪松云れあ存保其役ハ此大膳大内守護も政

道も某しが預り行へバ君の落度おちど又些共威おどきぬ脇道わきみちへ近らかさず共不義おこな衝はたらいた云解立いひなかずばさッぱりと腹はらを切見きりみてやるが情じょうぞ」と嘲あざける詞ことばよ堪たまり兼とも(修)お父長慶おやしが横死よこしと云ひ非道ひだらの巧たがよ陷入おちいつて生うまるいする冥途めいとの首途汝おとひを俱とも召連めしづれん」と勢ひ込こで立向たむかふ一ト間の内より聲高はやまるく(慶)キテ三好急激はやまるあ鹿てつ忽こつあせせう」と慶壽院じゅいん徐々しおりと立出玉だいしょくひ(慶)キテ存保事おんほじよ急いそるハ血氣けいきの勇いさなとて武士士官の嗜たしなむ所扇合おうあせを催さなしてアソ傾城きんじゆを口く説だす事ことも色いろをも香かをも知人ちじんが知しる科人かにんハ外ほかよ有ある、ア其囚徒めしゅうを是これへ引ひけは發はつと下部しもべよ誘いざなはれ悄しづか々くわく出でるを雪姫ゆきひと見るよ驚おどろく花櫻はなざくら花はな妹女めいか情無なきい何なにした譯わけぢや悲かなや」と問たずき諸いらへも涙なみだある(慶)キテ、問たずき共云ともい聞きす雪姫ゆきひハ自みらが召使めしふ侍婢家こしらぢやの捉つかを背そむく不義者おこなわざイ義輝殿ぎひ此方こなたの家來けらよも法やしを破はつた者が有ありやコ政せい道どうを能よ召めれや、義成程不義おこなの科人かにんハ修理りじの太夫存保おとひやう慶キテ存保おとひやすでは無いハいの(義)キテ、然しからバ外ほかよ誰だが不義者おこなわざ慶キテ、此方こなたの秘藏ひざうの浮家うきや老松永大膳おじまつ

久秀と云ふ鎌鬆男(松)仰共覺えぬ此大膳が不義したと相人へ何者
(慶)母、覺えあいと云れまい相人へ則ち那雪姫所も變らぬ其所で畜
生の愚鶴鳩と云れても惣たが因果と其跡も未云ふか。ア覺え無いと云
れまい。ア如何ぢやと鉄壙押へる八寸釘裏釘返す詞も無く玄よげみ
成こそ心地よき(慶)母君重て右大將頼朝の天下を治め玉ひてより大將
の身持下人迄其日々の忠孝一々よ書残されしを先祖尊氏公より自
らが夫義晴殿迄東鑑を持って家の鑑と取傳へ諸士の善惡忠孝を委く記
し玉ひしがや十三代目の義輝へ放逐情弱の大將と書記して末世迄笑
ひを殘か残さずか大膳以後を屹度省慎めよ一旦の誤りを改むれば其
方が不義の科へ是迄實雪姫が不義の相手狩野介是へ参れ」ハツトへ云々直
信が刀も枯し羽拔鳥不義の撻と白洲ある姫の後方よ蹲踞慶ゴリヤ兩人免
さぬ科あれ共先後代の忌日の追善命を助け暇を遣る豫て望の有る事

も此館でハ叶ぬがよ最前遣た絹の片端肩衣の折所も詮議して夫婦一所よ本望遂いナ合點か」と情も籠る浮詞有難涙よ吳羽鳥立ハ比翼の縁の綱花橘ハ泣々も同じ館よ有あがら物言交す間もあく契も薄き姉妹の互ひ又顔の見納か隨分無事で暮して給狩野介殿浮見拾無ふ頼むと云を直信ハ鴛鴦の双番の水離れ凋れ乍らよ出て行跡の仕舞を松永大膳(松)三好が罪を」と云を打消し(慶)義輝殿新浮臺と定まる身不義の惡名世上よ聞え花橘が言譯立迄臺の舍よ押込置き大膳ハ屹度預ける修理の太夫も夫迄ハ自らが預ると理非を譯たる後室の仰よ隨がひ存保浮供入よけり跡よ空然と義輝公花橘に懇の淵沈み入たる不興顔大膳が仕濟し顔(松)お母様ハ貳堅氣當世よハ適ぬ筈何を思のむ顔持てお心が小さい足利の大將が仕たい事成れいでハ天下ハ實の暗闇さ誰憚る事が有浮臺様の身上ハ次の臺の舍此松永が預る幸ひヨ申後よ必ず

斯々」と囁けバ打點頭(義)モ何でも松永ぢや大膳無れば夜が明ぬ夜明ぬ
中の其趣向出來たと悦び勇み帳臺深く入給ふ(花)コレ喃ゆ」と花橋涙
乍ら又行を大膳引止(松)オ、氣が濟ま道理、兎角憎い存保めニリヤ
後室と點頭合此方一人を科ニ落し殺さふとする下巧(花)エ、(松)オ、膳が瀆
れふ腹が立ふ其所を憲らぬ此鼻が裏の裏行奸思案と四邊見廻し小聲
ニ成り(松)コレ此方が手ニ懸三好めを殺して仕舞バ我君の疑ひも乾淨天
晴手柄の傍臺様ニ惚切て居る存保め今宵慥か又此庭から臺舎へ忍ぶ
ハ治定其足音を合圖ニ覗ひ討殺す其用意と袂より出す手銃(松)此火繩
ニ火を付てノ合點かと手ニ渡(松)コレ憲るまいぢや(花)ア、成程君の機
嫌を損ねたる那三好故夫あら是で(松)オ、夫々後詰ハ己が扣ベて居ると
毒氣を吹込み身を忍ベハ此方も窺ふ茂みの蔭筒を構へて覗ひ居る忍
ぶよハ臯月の闇も蔽れ蓑小笠も露ニ瀆れの道先にハ君と松永が教へ

よ迷ふ義輝公誰と答へ存保と答へん物と庭の草踏分く辿らるゝ待
設けたる花橘忍ぶ足音存保と構へし火ぶた引かねむ撞と響く大藥云
と計よ息絶たりサ仕濟したと聲高く(花)不義者の三好存保花橘が討止
たり出會給へと呼はる聲驚破と涉所中騒ぎ立番人宿直が各手よ焚火
馳違へバ傍母君慶覺法師(修)存保是にと飛で下り(修)南無三寶義輝公害
せられ給ひし」と七顛八倒鈍々足踏で忙れる内花橘の大將の死骸の刀
抜持て咽喉の鎖を一刺り岸波と臥を見向も遣ず(慶)扱こそく大膳が
豫ての巧此場よ居ぬへ逃失たか者共追駆討取と下知の下よりまつか
せと皆我先と退て行輝若君を伴ふて姥の侍従が惶々涙母君涉聲搔疊
り(慶)、良薬の口よ苦しと忠臣の諫めを用ひず松永よ迷はされ其身も
亡び花橘も非業よ命を棄さず事皆是先祖へ不孝の罪罰とへ云へど無
慚やと眞武將の傍母君人を罪せぬ涉悲しみ外目よ見て憐あり手負ひ

苦しき手を合せ(花)ア、冥加あや恐しや歎あらぬ流れの身がお肌を穢す
さへ有ヌ新添臺と迄お情の恩を怨ある我罪業大膳殿の計ひよ存保様
のお忍びを討バ君への云譯と教を誠よ思ひの外大事のく殿様を勿
体なや悲しや」と刀拔取飛石よ摺付く翻れ散たる及へさゝら輝若君
の傍よ寄(花)ノヤ若君様お前の爲よハ父湯の敵取違へても主殺し竹鋸
ハ此乃引國の捉よ一引宛見懲として給へるが切てハ少しの罪亡し父
の敵を妹と一所よ討たい念願も何事も皆水の泡^サ早ふ存保様息有る
内よ此身躰引てくと抜刀那方此方を詠め遣口説歎きて引息も深傷
よ苦しむ斷滅間敢あく息ハ絶よけり呀と涙の母君侍従不便と見やる
庭前へ徐々入來侍ひ共皆一同よ手を突て(侍)我々ハ小田信長が京留守
居松永が豫ての惡心斯る事も有らんかと主人がナ置たる故後迎ひの
爲參上せりと相述れバ(慶)何々信長より迎ひとや頼み置たる詞を違へ

志慮の嬉しさよ、是存保家の旗ハ此母が肌より掛て氣違ひない分
大事ハ神靈の浮箱に慶覺油斷召れあや輝若」と姥諸共迎ひに打連出
給ふ三好は跡を見送りて詰りくの手配りよ心を碎く折も折八方よ
り取圍む貝鉢の音鯨波驚破と見廻す門前より引返したる姥の侍從輝
若君を搔抱き(従)、^ウヤ存保様信長の迎ひハ偽り松永が徒黨の者浮門の
外へ出るや否此子も既に危駆所切抜る其間母君様奪取れた未其上
より慶覺三好も倒顛(覺)エ、主君を害し母君を擒類ひあざ人非人^ア、此上
ハ神靈の浮箱守護するが大事^ア』と寶藏へ駆入慶覺跡よ三好が(修)コレ侍
従若君を連まして一先爰を(従)、^ア親里の津の國へハ程も有桂の
里か佐賀の知己又身を隠さんお前も同一よ(修)、^ア我ハ此所を防の固
多勢の鯨波見付られてハ難儀の難儀早ふく^ア、^{ゼンカタ}詮方も泣々目と目

よ名殘の涙若君連て甲斐ぐ數も別れ行。同勢從へ松永喜藤太突然入
(喜)ヤア存保の虛空者兄大膳の計畧で慶壽院へ仕て遣た殘念あハ小男
め逃した替りハ汝が首攫へ落して呉んず」と威勢掛れバ合點と太刀拔
翳し割て入相手撰バぬ手切の早業切立く追て行取卷敵の燒討よ蟻
の這迄見透寶藏神靈無れば慶覺ハ慌て狼狽出給ふ戸口よ窺ふ忍びの
曲者夫と見より引擣げ行方知ず出て行跡へ入來松永大膳士卒引具し
身よハ小袖の鎧を着し二ツ引兩の傍旗を奪ひ取て押立させ(松)て何奴
も狼狽て義輝が死骸さへ捨置て逃居た年來仕謀だ謀計將軍職も家國
も序よ首も請取」と勿駄なくも乘掛り警撫んで搔切所よ立返つたる三
好存保修ヤア願ふ所へ松永大膳親の敵主君の怨思ひ知れ」と切て掛るを
家來が隔てゝ戰ふ中(松)ナ非業のぎたげニ犀め義輝が供爲げ」と切て放
つ鐵炮ハ三好が肋よ堪り得ず呴と角弓は反乍ら修へ薄傷も負せずし

て此儘死る口惜や父長慶も惡逆よて汝よ一味と末代迄惡人の名を取
ん事無念」と身を蹴き大膳目懸立寄を(松)と願叩くあ」と引寄首搔切
て彼所よ投捨(松)ア、心地能面白し是より直大和の敷よ立越ん先夫迄ハ
都の内金閣に籠らん」と邊を睨んで立たるハ羽項が阿房を焼討し威勢
も斯や安祿山叛逆とも朝敵とも云バ岩間の松永が弓矢取身の名を譽
と勇む心や榮花のでん金殿銀殿堂々々踏荒したる足利の館よ押勝押
熊王八十の梶や武烈王大惡無道の大膳が威勢に草木を靡かせり

○信長本城の場

秦に長城を築いて鐵の堅き又比ぶとかや小田上總の大守信長の居城
外廊破損の修復鋏の音も才橈も一度よ鎮まる擊拆よソリヤ晝飯よ晝休み
皆打連て入よける。柴田權六勝重が出仕を出迎ふ森の蘭丸互ひよ一揖
(衆)是へく蘭丸殿早出仕召れたの北國淺倉退治の内談彌々夜前ゆ合

せし通り信長公又も其趣(蘭)如何よもく左様で涉座る先年今川を
一戰よ討取しも君豫々涉信仰厚き津島の社祇園牛頭天王の涉利生然
よ依て京都感神院の祇園へ涉代參を立られたか使へ氣よ入の仲間此
下東吉發足したハ七日以前毎度四日を限つて歸る日取今よ於て歸ら
ぬ故渠が女房を呼出し証議致さんと存じ只今呼よ遣へしたりと噂區
區取敢ず東吉が妻のか菊夫が歸りの遲刻から其尋ねの品よりも外よ
覺え内玄關(菊)モ涉普請が有やらして此取散て有事へいと云つゝ庭
よ跪踞柴田權六詞を懸け(柴)涉代參よ上京せし東吉が女房よあ毎度の
日取よ二日の延引信長公よもか待兼歸國の日限延る故旅立の日又相
違の有無覺え有バ聞たし」と詞の下直と摺寄(菊)成程涉道理の涉尋ね大
切あお使あれべ其朝ハ七ツよ家を出られましたが今暑氣よ赴く時分
されば若急病急難ハ知ぬ事玄たが常から養生の能人先の食事へ覺束

あい連一時たは貯たまへて今度こんどハ往戻り四日の旅たびぢや白搗しらつきを二升焚たけ心得こころね
 したと夜中よなかよ起米おきこめを炊かすやら下焚したたきやら出來あが上つたハ丑うしの時最徐おそくと旅
 脚絆草鞋はんわらわらハ手造てつくりりで十日廿日穿はいた連つづきいつかな颶そよげる氣遣き遣ひ無ないソリヤ
 七しちツが今鳴いまなると直まと出でられて今日けふで七しち日女房じょぼうの事ことありや皆様みなさまより案
 ジじも一倍いちはい三日みどりの日延ひのびきのふ昨日きのふの晚ばんから癪じやくが起おこつて、辛氣しんきやと普請場しんばの茶
 をバ茶碗ちゃわんにかぶくく息いき次しき敢あず暗じやべりける(柴)様子やうすを聞程きてい淳じゅんらぬ東吉とうきち
 如何いか様遲さまおぞいハ不思議ふしぎやと互たがひよ見合みあす顔ほと顔太おほ息吐いきつ間まもすつたくもど戻もど
 る此下この東吉とうきちが狀箱首じょうばんしゆよ引掛ひつけて管笠片手くわいふたててよ息急いきつき(東)只ただ今歸國いまきとかつ躊躇くぱ
 (菊)此方こちらの人待兼ひそまちかねたと云女房いふやうよ目めも遣やす(東)後ご兩所様さまで應あふ上かみよもか待兼まちかね
 三日ひの日取延ひそな引ひの仔細しざい委まく書認かきしためお守札まもり札の此箱このばんへ封ふじ込こで罷有まつりあり早さう
 や後ご前後ぜんご披ひ見けんの後ご取次とりつきと指出さしだす蘭丸らんまる請取うなが委細さいの儀ぎハ披露ひろうの後のち暫しばら
 夫それに權六殿ごんろくだん後ご刻ときと箱携はこだげへ後ご前ぜんを指さて急いそぎ行ゆき跡あと見送みよつて東吉とうきちハ(東)

扱々圖無い汚かいた權六様お許と足投出し草鞋解々氣轉の菊が茶
を差出し(菊)如何で様子の有そある事何として遅かつたと尋れバ(東)ナ
權六様お聞成れて下さりませ何か大切あ湯代參夜を日よ次で登つた
所京都又ハ大騒動(柴)京都の騒動とハ(東)然バ(信長)公へ差上たる
密書又委くし共搔抓んでお話しやさふ豫て松永大膳が叛逆花橘と
云ふ傾城を義輝公へ勧め込折を窺ふ時も一昨十九日義輝公又ハ不慮
の涉最期室町殿ハ灰燼の煙りの中鉄炮矢叫び馳違ふ人馬の聲の夥多
さ斯る折又参り合せ外又見んも木意に非ずと煙りの中へ駆入て一々
次第を見る中又も涉母君と家の旗敵の手へ奪取バ奪返さんと働く人
々三好修理太夫存保殿も終よハ討れ幼稚よ在ます若君も行方知ず皆
散々一方あらぬ都の騒動未此外又忠義の品々残らず書留しと今見る
如く語るより扱へど驚く女房お菊權六も仰天し(柴)扱々思ひ寄ざる珍

事信長公よも嘸涉驚き然乍ら出來したり東吉一大事の注進、手柄よ
ミ(東)ヤもう歩仲間風情の私し心一杯の働きでござりますイヤヤ權六様
見ますれば未だ済普請も果ぬ様子私しが旅立の以前より懸つた修復
何所が一ツ出來た共見ぬハ愚鈍しい穿鑿室町の済所と号て要害第一
の館ざへ不意よ逢てハ一炬の煙と成時節近江又佐々木伊豆又北條北
國又淺倉四國九州敵あらぬ國もありに普請奉行の山口殿何を緩々構
てアヒ獨卿く後の方何時の間よかハ九郎次郎(山)ヤ何奴アと思へバ猿
松の一文ぬめ二合半の頤から千五百石頂戴する九郎次郎が聞共知ず
不敵の雜言最一度吐さば手ハ見ぬ」と切刃廻せバ(東)ヤお急成るゝあ成
程千五百石と二合半懸隔の違ひなれ共皆信長公の傍家來主君のお爲
に成事なら千五百石ハ愚何程の大身でも遠慮ハせぬ此ぬめ戰國の砌
はんくだらりの長普請不用心と存ずるからヤたが誤りか(山)ヤ未下

郎の存外者元來汝へ遠州濱名の浪人松下嘉平次が草履掴んだ素丁稚
め主の金を横取りし國遠したる横道者今信長公又奉公し汝が手柄よ人
を讒する腮曲めて吳んと立蹴よ蹴上る足首摵(東)へへ松下が金横取りす
れバ山口殿の此膚で踏と云觸でも有たかヤ涉大身よ似合ぬ近頃卑劣
又存ます」と摵んだ足首引繩返し見向も遣ぬ大丈夫傍又始終を見て取
權六(柴)ナ哺山口殿智者も千慮よ一失有り愚者も千言に一得ありとア
せん戦國の此時城外修覆を隙取ハ不用心とア渠が一言ハ則ち愚者の一
得でもござらふ某し只今出仕の序信長公へ言上し是非ハ宜く御沙汰
有んと云捨奥へ入跡ニ譯をお菊が(菊)ア危駆ア東吉殿山口様ハ
御大身滅多よつかく物云左やんあ(東)ヲ其方迄が大身小身ソリ云に及
ばぬ雉子と鷹其鷹でもナ時又因と斑鳩又も捕る雉子めハ又蛇よ骸を
巻して羽打シ微塵よ碎いて餌食よする先其如く貴賤上下と隔つ共魂

ひよ變りハ無」と山口を尻目より懸嘲瞬舌打舌鼓腹より据兼九郎次郎(山)身
 よ當付る存外過言堪忍成ぬと刀の鯉口此方も一腰反打て抜バ切んと
 詰寄バお菊が中より分入て夫を宥る其所へ(柴)涉上意と呼バつて立出る
 柴田權六双方押鎮め(柴)如何よ東吉只今差上し密書逐一よ涉覽有て當
 座の涉裏美墨附頂戴せられよと押披き(柴)此下東吉へ下す狀其旨趣此
 度松永大膳が逆心より依て室町殿の騒動に參り合せ比類無き働き感ず
 る餘り千五百石の知行宛行ふ者也永祿八年丑五月信長判と讀終り東
 吉が手より渡せば夫婦の夢見る思ひ(東)ハ有難き涉惠と大地よ頭を
 三拜九拜悦ぶ事ハ限無し權六重ねて(柴)ナ(東)吉此一腰ハ信長公の涉差
 替役取立の證の賜物戴き召れと指出し(柴)重ねての仰せより山口殿より
 加役せしめ普請早々成就致さずベシとの涉事此柴田ハ横目役九郎次
 郎殿其旨心得らるべしと云バ返事も澁い顔東吉刀を押戴き(此)ナ山口

殿只今お聞の通り、千五百石の俸取立以後ハ同格同役でムる卒先那方
へお通り」と挨拶すれ共不肖ぐ瓦ひよ屈める二腰の禮義よ徐々打通
れば柴田も脇へ煙草盆提て片寄横目役お菊も俄よ衿繕ひお内儀ふう
へり前垂を取て捨ても木綿物小袖よ紛ふ居彷なり東吉山口よ打向ひ
(東)是迄ハ貴殿のお指揮何時頃成就と思召す(山)然ば今月中よへ出来致
さふ(東)シテ大工人歩ハ幾人懸召れた(山)六百人懸つて居ります(東)然程
の人數でハ最些早く出來さうあ物(山)トハ何故な(東)ハ高が破損の綴り普
請凡外塙を打毀ち新又建直しても夫程の日數ハ懸らぬ筈(山)ヤレ東吉
殿此山口又ハ目も口も有まいか何やら油斷も致す様あ云分柴田殿(柴)
成程油斷の有ふ様にハ存ぜぬが東吉殿の了簡とい雲泥の違ひヨリ大工
ひよら雇を呼出し篤と浮吟昧成れて宜らふ(山)如何にも左様ナク棟梁日雇
頭早く参れと呼聲よ々答へて立出る棟梁作兵衛日雇の市介が東吉を

見て興覺顏(作)バ那々お仲間の猿冠者が山口様の傍よ居る」と目引袖引
 笑バお菊が傍から(菊)コレ東吉殿ハ今日只今千五百石の知行取山口
 様共同然の奉行様慮外云たら免さぬと呵られて又愕然する二人を
 山口ぐつと睨付(山)大切あ塙の破損出來が遅いと有てナ某しが油斷も
 する様ふや上る者が有棟梁共が油斷から身よ批判を受さす憎い仕方
 云譯有巴目通りで眞直よ吐し居ふ(作)是ハ思懸もないお叱毛頭油
 斷ハ(東)ア仕つらいで仕つった様よ此東吉ハ思へる判然と云譯せ
 いア何どく(作)ハイ先北面百間計りの高塙ム大工三百人手傳ひも三百
 人都合六百人の人數を以て油斷なく仕つれぞ常体の普請どハ違ひ外
 堀の石臺足代迄中々粗忽よ成ませぬ然よ寄て(東)、最能ハ念
 念を入ればあらぬ御破損此東吉が指圖せふシ兩人共直と出いく
 プア外玄關の見附の櫓其石臺ハ凡何程有る(作)ハイ十間四方もござりませ

ふ(東)ム、其十間を十ニ割バ一間の土臺其一間の土臺を建直すよハ人歩
ハ幾人(市)ハ一間ならバ大工ハ三人手傳ひ三人(東)ム、其六人でハ出來す
るか(市)ハ體(たしか)よ出來致しナツフ作兵衛殿(作)、出來る共々(東)ハ、
所お聞成れたか此東吉が工夫を以て外堀殘らず土臺迄明日中ヨハ成
就致させお目ヌ懸(かけ)ふ(山)ヤ、何と々貴殿が工夫で明日中ヨハ成
何と思シ召す(柴)如何も々(ヤ)何東吉殿山口殿ハ今月中貴殿ハ又明日
これ(おほ)ハ大きな違ひシテ其工夫ハ如何でござる(東)只今ナ付て見せませふ
作兵衛市介右云た割方一間ヨ六人の人歩十間でハ六十人百間あれバ
六百人其中ハ今二百人を増加ヘ都合八百の人歩を以て明日中に屹度
出來せ(市)ハそりや滅相(あつさう)中積(ちゆくづ)り假令二百人三百人手傳ひを増た速
明日中ヨハ何としてく(山)ガ夫々此山口が下知をもぞき若其人數で
出來ぬ時ハ(東)テ知た事此腹々手前が指圖(さしひず)涉合点が參らずバ微細(さい)ヨ云

て聞しませふヨリ汝等も篤と聞先下地崩ふた六百の人歩へ其儘置加増した二百人の内四十人ハ雜用養焚八十人ハ東西南北二十人宛手分して繩釘萬事の小使役跡八十人是も又廿人宛四方へ分て食物何か加勢の役軍の陣所同然よ兵糧養焚を續けねバ士卒の懸引全からず諸職人も同じ事萬事よ氣を付手廻し能して宛がヘバ細工も自然と涉往よ朝夕三度ハ握飯片木よ盛て持運び擊析も打事ある足場の高低下り上り是も運んで夫々よ懸渡して進むれば面々勝手の取賄ひ食後の煙草も三吸次火繩を持って廻れば濟一時の懈怠ハ一日の懈怠と成頭の者共心得たか此割方さへ考ふれバ城の五ツや十四五ハ一日よも成就する東吉が割普請工夫ハ斯の通りが」と詞淀まぬ懸引ハ万事よ渡る後學の才智を感じずる計りなり。山口ハ開た口手持無沙汰よ棟梁頭庭よましくし手を突バ權六聲懸(柴)ヨリヤハ兩人東吉殿の指圖の通り明日中よ仕立上い

違背せば曲事たるべし罷立と有けれバ(兩人)ハイく畏よりましたと連立
跡から市介が山口よ目と目を見合せ普請場指て出て行。時しもお成と
嘘々聲スハ涉主人と夫々よ席を改め待間程無徐々と立出給ふハ大將あ
らで信長の涉臺几帳の前數多の侍婢取々よ續いて出る森の蘭丸威義
を正して押直り(几)ハ東吉殿一間を隔て信長公始終を聞し召所只今
割普請工夫と云頓智とや甚だ涉感淺からず重ねて下ざる涉墨附と押
抜(几)此下東吉儀古來稀なる割普請を考へ居城の破損早速成就致す
べき段末迄重寶共成べき工夫神妙也知行千五百石の上今五百石加
増せしめ都合二千石宛行ふ者なり今月今日信長判(ナフ)聞れたか東吉自
らハ几帳と云者信長様諸共残らず聞いて居ました勝れて頓智發明な家
來を持へ主の龜鏡と殊あり涉機嫌未直に吩咐する事有と仰しやつた皆
同道して早ふ奥ヘナモジ和女ハ内室お菊とやら此几帳が案内してお目見

を爲ませふ。麻よ連る蓬とやら烈しい夫又連添ふ程有て中々發明さ
 ふあ姫ごぜハ姫ごぜ同士自らも只成ぬ身成バ何かの事を頼にやあら
 ら爰へ但し手を探よ往ふか」と打解て宣へバ(菊是)へく有難いわ
 詞只今迄仲間風情の女房が殿様へお目見奥様がお引合せ遊すと餘
 り冥加恐ろしい」と會釋翻る、女子同士侍婢共が指寄て手を取進る廣
 底(几)皆々此方へ」と几帳の前お菊を伴ひ入給へば權六蘭丸續いて立柴
 山口殿ハ大工人夫を呼寄て明日中の普請の手番万事指揮を渉合點か
 率東吉殿此方へと打連てこそ入よけれ。折を窺がふ市介が四邊見廻し
 突然出(市)山口様先程ハ(山)待て居た」と小聲にあり(山)今聞通り猿冠者
 めが口まつ故普請よ事寄日を延した此方の巧が皆すツかり兎角生於
 てハ邪魔な東吉彼奴めから手短に仕舞工面ハヨリ斯様「」と囁けバ打
 點頭(市)澤らぬ用意此通り」と縫よ巻たる一腰打込其中よ疊引上根板櫈

明竊を入れて山口が煙管を磕々打叩き紛らし窺ふ奥の間より上下衣服
改ためて立出る此下東吉お菊も俱よ袴襷の裾を引せる長様傳ひ歸る
を送る權六蘭丸(柴)東吉殿涉苦勞何事も又明日(東)是へく涉叮囑率涉
一同よ涉門迄同道致さふヤ山口殿未是にか彌う普請ハ明日中(山)成程
急よ仕立ヤさふ扱う結構な涉紋付の行裝草履取から二千石早い涉出
世目出度が鼻の先の智恵を揮ひ口先で知行を取ても武士は武藝を鍛
練せねば萬一の時の役み立ぬ(東)是へく涉道理ある涉挨拶拙者も
山口殿程弓矢打物手練致さば最些早く立身を致さふ物以後ハ貴殿よ
涉指南を受ませふ(山)望あら只今でも眞剣でお目よ懸ふ(東)夫へ一段
涉兩所へ見分よ入る爲一寸お相手よ(山)望む所と拔放し(山)斯振上
た刀の下(東)潜つて見が遅速の最初(山)合點と猶豫もあく蹴上る疊ハ
眞二ツ翻りと飛入る刀の柄抜取途端よ眞の當云と計りよ山口が口よ

似合にあへぬ眞轉覆庭まつさかさまにはへぞッさり轉ころく(市)コリヤ爲させぬにはと出る市介直すよ玄さや
 つぶり大裝姿切おほげざぎり柴蘭あらばら天晴てはれお手際てぎわ見事くわいじくと兩人ふたにんが譽ほひればお菊きくも嘻うれし
 氣きよ(菊)口くちほど程ほどにもあい山口殿能氣味よいきみとな云い乍仕舞はじまひハ如何いかでござんすへ
 (東)ソリヤ些ちつとも共大事おほきごとあい渠かずよ聞きさぬ密事かうじの相談さうだん淺倉退治あさくらたいぢの軍術ぐんじゆハ又明日松
 永大膳だいぜん久秀ひさひでが在城いたハ大和だいわの志貴豫しぎよして攝州表せつしょひょうも某まことしが一味徒黨ひとたうの者
 共數多伏置おおむかへおひきたれバ慶壽院けいじゅいんを奪返だつばんす發足はつそくハ明々日あくまつ今日きのう目前まくまつよ山口さんくちが我わを
 誰なばかる巧たくみの裏うら其所ところを察さはして那通り最早あつと生うて歸かさんさんと庭にわよ下立死活おりたちしづわの生いき
 噴のと一息九郎次郎ひそひきくろうじろう四方詠あたりめて面目おもての砂打拂さなづぶふ不首尾ふしゆびさを繕つくろふて遣おとる
 東吉とうきちが落おちせし刀拾かたひきひ上あが(東)山口殿さんくちのお手討てうちみ市介めいちめが無慚むざんの最期さいご血のを
 拭ぬぐふて納なられいと渡わたせば取とて偵さがよも返答へんとうしかあの目禮計めり森もりも柴田
 も一同どうよ(皆)必然じねんばくの式禮しきらいハ庭にはみ立木たてきの楠くわ福つかやお菊きくを伴ともなふ此こ下したが
 出世じゆせいの首途かさとが(三重)勇じよきしさ

○小田家別行の場

領内へ心の儘の一構信長の下屋敷庭の花壇に咲馨栗の花を友とや物
好へ日本目馴ぬ納涼床唐木の卓の穿脚に雲綢縁の蟬疊魯生成ねど一
睡の轉枕の伽小姓蘭丸へ傍よ扇ぐ團扇の微々と専勅や增るらん山
鳥の時隔つる几帳の前東吉が妻の園菊諸俱よ殿を見舞ふ夕日影侍婢
達が提重を包む巾紗や紫色の抱へ取々入給ふ遠目よ森の蘭丸が夫と
見より蘭是へく奥様園菊殿能こそお出來成れました女ぎれのあい
下館涉馳走よハ馨栗畠の花盛今家來衆が水打てすんすりと宣坐り
ます」と持成バ園菊が(菊誠)よ奥様ハ度々お越成れて涉覽もや姿しハ初
ての事なれバ珍かある花の眺めア釣花生よ迄白いと赤いと一つの莖よ
咲分たる珍らしい馨栗の花ナア儿帳様(凡然)ばいの釣舟に棍のあしら
ひ殿様のお手自の投入でがモマア那お廟へ四方よハ本を散かしてお

風邪でも感ふ物お裾すそよ是をもとたと持したる被かぶを密そつと奥様の心遣ひよ園菊
も裾すそよ取立騒たちさわぐ音に目寤めざます小田信長あくびまさだ欠交りよ起直きちやうり信几帳きぢやうの前園
菊久ひきく顔かほを見ぬ故ゆゑ見舞みまいよ來もとたとあ几帳きぢやうへ取分懷胎とりわけわいたいの身歩みあゆを歩あるむも
身の養生能やうじやうのうぐく如何様もうはづか最廿日餘り歸らぬ故氣遣きづかふハ道理當春參内さんだい
の砌みさき義輝公あいよ逢奉つり思はざる官位昇進二品上總の大守たいしゆ補ほせられ
しハ信長が大慶其上義輝公の涉母君慶壽院我われを我われと思召おぼしめして小鍛治こがが作さ
の長刀迄下くだされ都みやこの事を頼たのむとの涉詞しんこん心魂こたよ應おこへ忘れ難だれく敵大膳だいぜんよ
一味の武士北國の淺倉義景都ほとみて討うて捨直すてすぐに渠かれが本國ほんぐへ出陣しゆぢんと思ふよ
共音ともごゑ聞えし越路こしどの雪幸ゆきこうひ時節ときせつも夏なつよ赴おもむく時を得て一合戰いちごと思ふよ
り山口九郎次郎を是もとへ伴ともひ軍ぐんの評定松永大膳まつながだいぜんの志貴の城じゆよ籠こる共又とも
ハ泉州せんしゅう或またハ京都きょうとよ徘徊はいはいする共區ごくの風說ふうせつ此下東吉とうきちよ云いひ吩咐つぶはつ發向かうさせ
しも皆みな義輝公あいの仇むかを報むくはん其爲先年今川を退治たいぢせしも當所津島たうしょの社

祇園午頭天皇の神力よ依て打勝たる例よ任せ是より程近き津島の社へ祈三七日の潔齋も今宵も満する我大願晝連も此如く讀懸しハ戰國策秦の始皇帝が威勢を借る此信長諸國を平均し天子の震襟をも安んぜんと思ふより外他よ事あし几帳も園菊も今夜は是よ一宿せよ馳走以後程蘭丸用意を吩咐よと心置せぬ大將の詞よ園菊横手を拍(菊)奥様お聞遊したか中も烈しい信長様東吉殿が目利して涉奉公又參られしも道理かいサアヤル帳様今宵は是よお泊成れ立行遊ばす殿様のか仰下そぎや有まいかへ(凡)成程く此様事が有ふかと持して來た寐覺の小筒侍婢共持て來いア(イ)間の障子の中皆引連て入給ふ早暮懸る夏座敷風が霧然銀燭を各手よ連々山口九郎次郎涉傍よ手を支へ(山)三七日の潔齋も早成就の今晚思ひ寄ざる凡帳様の傍入來傍馳走ハ某蘭丸に任せられ例の如く津島の社へ參詣もやと伺へバ(信)實う我も然ハ思ふナ山口毎

夜く出て行を彌^よく社參と思ふて居るあ(山)改^{あらわ}つた涉尋ね如何よ
も參詣と存じ罷在(信)ハ、拔目なき汝あれ共欺すよ手あし神詣とハ大
きる偽り眞^{まこと}人知ず隠し置たる忍び妻几帳が手前を穩便^{ひんべん}よせん爲汝
等迄深く包むと知ざるあ」と宣^{のたま}ふ詞の先折^{こさば}て(山)孫子秘術を傳^{まき}へる時吳
王寵愛^{ちようあい}の妃を殺せしとハ事變り軍評定の我^もよ隠し給ふハ大き^{おお}きよ相
違殊更今晚の潔齋も相調^{ひそ}ひ明日ハ淺倉退治柴田權六を召連^{めしつれ}られ涉門
出の手筈成^{ははずなる}よ不淨^{ふじやう}よ泥^{まみ}れ給ふ事軍神の恐れ有^お涉嗜み^{たしなみ}ひへ」と席を打た
る諫言^{いさぐり}よ大將面^{おもて}を變じ給ひ(信)ア聞度^{きづ}もあい唐人の引事夫^{たうじん}知ぬ信長成
す天子よハ十二人諸候よ八人ハ古人の綻妾嬖^{おきておもひもの}の二人三人置バ迎山口
連^{づれ}が非太刀^{ひだ}ハ受ぬ(山)然程苦しからずバ几帳様の涉方^{なげ}へ何故^{なぜ}穩便^{ひん}
ハ(信)ヤ未吐^{まだぬか}すか愚鈍者汝^{ものわざれ}よ對す詞^{いふ}ハ無い蘭丸^{ラム}醜頬張^{じやつぱはれ}
たる下知の下發^{したは}どハ云ぞ立兼て打兼れバ(信)何^{いふ}を猶豫^{いうよ}早く打ト^{たて}と重^{かさ}

ねて怒り頻あれハット答へて腰扇眉見真向七ツ八ツ打れて無念を堪る
山口(信)最能々出來した愛者扣へて居よヤ九郎次郎蘭丸が手を借りて信
長が打擲廻心外よ有るらん(山)ハ、何が扱諸傍輩の見る前か又ハ歷
々の殿中あらバ耻恥辱とも存ずべき云バ主人のか手打畢竟か心を引
見ん爲の戯言傍耳立しハ君の傍短慮不宵なれ共知行よ替る此骸打
擲ハ愚命の傍用に召る共傍恨よハ存ず生じと平伏す(信)、然こうく
ヤ蘭丸ハ奥へ往て女共が饗應必ず爰へ出る事無用早往々の目遣ひよ
發と諾て入又けり後見送つて(信)何山口只感ひの止難きハ色慾なりと
兼好坊主が書た通り弓矢の道も投遣三寶忘れ難きハ夕邊の睦言旁々
待との約束されば往ねば成まい(山)ハ左様あらバ若跡で(信)其所が談
合三七日行をすると云たりやまん誠みして居る几帳幸ひ爰より几帳が
被是を汝が冠て居りや事ハ濟(山)ア私しにや(信)興がるハ隙の入る事

ぢやあい万—奥が來たと儘物も云ふ傾頭と頷首計りで能」と被打ち着ち
 よてく走り(山)ア、ヤ／＼／＼ア最影が見ぬ飄る役目よ當つた事ア儘
 よ主と病よ形代の儀よ備ろか」とすつぱり被ぐハ伏籠の化物鼻息もせ
 ず守り居る几帳の前へ斯う共いざ白臺よ土器も神よ供る心よて跳子
 持手も園菊が障子の内を差覗き(菊)アレ只か一人涉窮屈ある立行殊よ暑氣
 の最中よお煩ひでも出やう物酒と云てへ上るまい祇園様へお供の神
 酒とヤテ進ま玄よ」と障子徐々指寄て(菊)几帳様のお寸志お供の神酒少
 し計り聞し召れて下さりませ」と云ひ何かあ返答へ頭ふら／＼振廻せ
 バ(菊)アレヤ否と渋意成るゝか冠計り成るゞへ(几)夫いのふ開て又お氣も
 盡ふし酒が否ならお烟草でも夫も否かへ此暑い時分蚊の蟻よアリヤ扇い
 てあと進ましよ」と二人が團扇でばつたばた扇ぐ拍子よ薄衣が脱て見
 合す顔と顔(菊)ア山口殿か(几)九郎次郎(山)南無三寶アラ怖や」と逃るを引留

(凡)コレ待やく 如何でも碌あ事ぢやあい殿様へ何處へ遣やつた有様云
云くと急立給へば園菊が(菊)奥様然でござんす共(ヨリ)大抵の事ぢやあ
い一ツ穴の狐殿化の皮を顯はしたと傍から腰押侍婢役汗を流すハ九
郎次郎(山)必定期で有ふと思ふた必ず云あるとの涉意あれぞてんばの皮
云て退よ大殿へお妾狂ひ(凡)ナム何と云る(山)レバ其様よ早角の生
さふあ額付夫が否さみ隠し成れた確定所へ存せぬが此館へ入来てか
ら一夜さも缺さずよ如何でも今咲花よハ目の付習ひ今夜ハ几帳様も
來てござる渉無用と止たれバ夕の睦言が身に染みて是非よ往と仰やる
故明日ハ軍の首途唐の倭の引事云て諫言ナセバ夫が曲事逆是より此様
よ腫る程扇で打据直と走て跡白浪尻よ帆懸て今頃ハ漢人の最中、羨
ましい事でハ有」と無事有事云并べ焚付らるゝ几帳の煩惱胸押撫て息
を次(凡)何を言よも恨めふよも殿様へ入來た跡何か云間よか歸り有べ

此体も如何なり此被を几帳が着てお歸りを待受か諫^{いさむ}て見る思案^{し案}(山)

夫へ一段上分別園菊殿も先奥へ我等へ次よて窺^{うかが}ひんと先よ立バ園菊が(薔)奥様必ずか漂りあふ口で計り涉^{あつ}仰^{しらす}すとお顔の細りも何處やら
も浮吟味^{うきんみ}が肝心^{かんじん}と笑て是も入よける。几帳へ跡^{あと}よ脱^{ぬけ}捨^{すて}し空脱^{きぬけ}の衣の恨
しく又妬^{ねたみ}しと打被^{うちかづ}ぐ角を隠^{かく}しの姿^{すがた}と^ハ知ぬ夫の歸り待月さへ曇^{くも}る村
雨の音も頻て(三重)庭の面^{おもて}へまだ乾かぬよ驟雨の歌「空^{そら}さりげなく燈^{すす}
る月哉^{かづ}」と連ねたハ頼政が一代の秀逸^{しゆいつ}とや^かく空^{そら}よも月が笠召^{ささめ}ば我も
情^{なまけ}の雨舍^{あまやど}り桂男^{かつらをと}が通路^{かよひぢ}の歸^かるさ送^{おくる}る此笠^{この}の君が手^て自差懸^{かわさしかけ}て歌「一人
ハ濡^ぬぬ夕立^{ゆふだち}の雨の足部^{あしふ}の亂^{あたたか}る、酒機嫌^{さけきげ}彼處^{かなた}此處^{かなた}へ轉りく轉^{くわ}く轉^{くわ}く
旋^{まわ}と笠^{かさ}が舞^{まい}が目^めが舞^{まい}か^くア其足元^{あし}で^ハ危^きい夜道^{よし}切^りて是^ぜをと言つ^ハ守^{まつ}
を綴^{つづ}くくと懸^{かね}て結^{むす}んで付纏^{つきまと}へれて猶^も思^{おもひ}が極^{まさか}の桂手操轉^{かつらをと}くい^く何時^{いつ}
ともあしよ(信)内^{うち}ぢや夫よく九郎次郎が撫^{なで}待兼^{まち}んと開く障子^{しようじ}の内

の様子知ぬが佛無言の行(信)て、窮屈^{きびくつ}有たであらふ几帳^{こじょう}へ爰^てへ來^{ひせ}ぬかく頭^{かぶり}ふるひ來^ああんだかく夫^ハ満足^{まんぞく}したが誠^{まことに}思ひ内^{うち}よ有^ハ色外^{いろほか}に顯^{あらは}ると今宵^{いま}と云今宵^{いま}深濕^{じゆしり}と契りし様子汝^{なむぢ}よ咄^{はな}して聞し度^{かほ}が顔^{おもて}を見て^ハ恥^{はず}しい窮屈^{きびくつ}あがら其儘^{そのまま}に聞て吳^{くれ}合點^{がってん}かく^{さそ}扱彼君^{うしかみ}の方^へ行内^{ゆきうち}の様子^{さま}を聞て有^ハ優^{やさ}しや君^ごの小歌^{こか}で^あ小歌^{こか}灯火^{とうひ}消^きて昏^{くろ}して最物^{ももの}凄^{ひど}き折節^{おりそ}よ君^ごが來^たらよやと言^た其處^そで妻戸^{つまど}をほとくと叩^{たたけ}バ又君^ごが誰^だや妻戸^{つまど}を叩^{たたけ}く水雞^{みずけ}かと歌^{うた}た其時我^わも勃然^{はつぜん}して小歌^{こか}雨^{あめ}の降夜^{ふるよ}よ誰^だが瀧^{たれ}て來^たふしよ誰^だよと答^{こぶ}るハ人二人待身^{まつみ}かのと言^たれバ其儘^{そのまま}立て掛金^{かけがね}を瀧^{たれ}と外^{はず}された其時^はよ某^{それが}しハ謠^{つまご}妻戸^{つまど}をきりゝと押開^{おしひら}く浮簾^{みづれ}の追風^{おひかぜ}勾^ひひ來^{くる}人の心^心の奥深^{おくふか}さ其情^{なまけ}こそ都^{みやこ}あれ花^{はな}の春^{はる}紅葉^{みみず}の秋^{あき}誰^だ思出^だと成^{なり}らん^{ひつたり}と密着^{だきつけ}と抱付^{だきつけ}たれば楓^{かへで}の様^{よう}な美^{うつく}しい手^てで某^{それが}しが手^てを取^とて奥^{おく}へ連^{つづ}れる、程^{ひか}よ參^くるくくくと通^{とほ}つたれば早^{はや}酒肴^{さかな}を調^{さと}へて獻酬^{さげしゆ}つ押^{おさ}へ

つ呑程よ早ばつてと酔てざんざの瀆松と唄ふた
歌「天竺震旦我朝」
三國一ぢやとの酒に成濟た玄やんく酒も能頃深濕と又もや雨が降
の神杉夜半も過ん率や往と云たれバ大事の殿の惡事災難のあい様よ
と付て吳た此守り添けあいく其跡を聞いて吳ハハハシや最何様言れ
ぬく寧殺せと正躰も泣つ笑つ横よ轉りハ括り枕の獨寐よりも二人
寐やうと抱付たる衣の香の被を取てナ、几帳か(几)アイと言様胸づくし取
て引寄何處へ入來たく(信)て夢よ成く、何者よ信濃の善光寺へ參
つた(几)ア、つがもない一夜の内よ善光寺へ參らるゝ物かいあ(信)ア、其る
ち鏡紫の五百羅漢へ參つた(几)ア、夫も一夜よ行るゝ物か、正躰あや」と
引寄引据(几)何も彼も聞ましだ大將の傍身柄妾嬖へ有習ひ左程よ包給
はず共あぜ疾よりも宣へぬ夫を否とゆよこそ祈誓ぢやの行ぢやのと
神や佛を勿駄あい日頃よも似ぬお心や」と腹立涙の口說泣信長ハ諾す

く直と立て花生の罌粟手々取上(信)周茂叔が愛蓮東坡が竹皆隱逸の翫
び是ハ是一莖よ赤白の咲分時しも此庭よ咲たるハ吉凶を知しむる天
の標示花物言ぬぞ源平の色香争ふ花形を見よ枝よ取てハ連理共又兄
弟夫婦共離ぬ中よ譬し物和女が腹よも我種を孕つて臨月に望でハ生
るか死るか二ツの境千花万木已が種々咲變化を分て此罌粟ハ散際の
涼しき花信長が胸中是を以て思案せよ」と花を渡して悠々と帳臺深く
入玉ふ跡を見送る後の方(山)様子へ聞た」と立てる九郎次郎追取刀拔手
も見せず罌粟の片枝を切放せバ(几)何故」と驚く几帳を立々撥しと刀
の脊打々据く(山)妹此兄が云含入込した宦仕信長が寵愛よ絆され
大事を忘るゝ不所存者徒者此罌粟を謎よ懸たる我々が身の上氣取た
りと覺たり然有バ此所よ足へ留難し今切た此花の赤きハ小田の旗印
信長が首を先此様よナ妹今宵中よ合點かサ何とくと氣を急程憂辛

重る几帳の前胸よ劍を刺思ひ(凡兄様の)腹立尤共道理共今更詫る詞
も無お差圖を受てより傍近く傳きて今日へお首を明日や討て見ふ
物と思て暮す其中よ子迄孕す身の因果逆も是迄延た事切て此子を産
迄ハ何卒了簡して給と手を合せ詫けれど(山成ぬ)其根性でハ得討
まいと有て手延よして置バ却て不覺腰抜の妹持ぬと思バ一本立九郎
次郎が踏込んで信長が首取んと駆出る(凡)ナフク短氣あ情無縁を切るとハ聰
懲る父上共母様共力み思ふて居兄上飄る事言ず共矢張元の妹ぢやと
言て給赦て給と詫歎くを礎と蹴退(山)吼る程縁切が否ならバ首討て渡
すか(凡)サ夫ハ(山)夫が否あら矢張勘當サ如何ぢや(凡)アイ討ま玄よ(山)確
と討か首取か(凡)成程討て見せませう(山)出來したく(コソヤ)手引さへすり
や身が一太刀ナ呑込んだか(凡)アイ私も傍前の妹ぢや物何の後を取ませう
手引の相圖ハコレ此片枝障子へ映るを報知と思ひ待給へ(山)オ、合點必ず

待まつ「と夕露の罌粟の木蔭よ身を忍ぶ跡よ妹へ右左つ今更何と詮方せんかたも
涙片手なみだかたてよ取上る花はなさへ哀知顔あいじしぐほよ障さはらバ散ん此罌粟の跡よ殘のこるも花の種たね
死す然そぞぢや迷まよふたり信長様の身替かわりよ立て死しるが身の云譯いふゆイヤ待暫しゆし私が
死すたら此かお腹なかの子迄俱ままでともに可愛かわいやあア月の光ひかりも日ひの光ひも此世から成無なるむ
明あきらの闇やみ一人と思おも二人の命思おもひ切きつても切兼きりあわせる女心めんごの愚鈍ぐどくくと
實まことよ誠まことの此罌粟けいしょの花思案はなしあんせい迎給おこなはりしハ矢張やつぱり此身このみを君きみが一日いちにちの情なさけ
ハ妾わたくしが百年ひゃくねんの命みことを捨すよの詞ことばの謎解なぞけて悔くやしき纏まとうび帶た長ながかれと社祝しゃしゆひしよ短みじか
き親子おやこが契ちぎりやと聲こゑを立たねバ口の内うち涙なみだハ咽のどみ咽のど返かえり身みを打う臥うつて歎なげきしが
漸しおく々心こころを取直とりなおし几こし疊よ兄上お兄さんの待兼まちかねと又取上る此花はなも死出しでの友ともとハ白罌
粟しらぬいの凄ひど々と立上たつり萎入しおがいるこそ傷いたしき九郎次郎くろうじやうハ息いきハ詰しづか妹めいが通知かけられを松まつの
貫板ぬきいたいたん様裏ようぢよ隠かくし置おきたる片鑄かたてうつ館やう目の鞘樽さやふねぬ相圖あいとの報知ひじ灯影ひかげと俱ともに時社じじゆ
移うつれと指足さしきしゆ拔足ぬきあし罌粟けいしょを目當あてに突込つづこ穗さき先さき翔はしと折おちれバ山南なん無三寶ぼう仕そん損そんせ

じと柄を投捨刀閃と馬手の障子一度よ開ばゞ如何よ相圖の花ハ蘭丸
が妹を高手よ縛り上中央にハ大將信長小鍛治が薙刀片手よ握るハ鎗
の穂先四邊を睨で立玉ヘバ山口大きよ顛倒敗亡妹を見捨引返すを(信)
ナ明智十兵衛光秀待々やツとの浮聲よ惄り仕乍ら振返り(山某)シハ九郎
次郎時定明智十兵衛光秀とハ鹿忽成浮仰」と云せも立ず(信)愚々今突懸
たる此鉢先片鎌館を鍛練して北國淺倉よ身を寄たる十兵衛光秀退引
させぬハ此館先當春都祇園よ於て數多の非人を手よ掛け我ニ阿る汝が
所存アラ心得ずと思乍ら主従の約をあし心を付て窺ふ中妹の几帳よ手
引させ信長を討ず謀計疾より知たる故蘭丸に頬を打せしハ短兵急よ
汝が巧今宵中よ顯して不意を討ず我計略一々肝よ應しかと眼中銳き
大將の詞ハ胸よ應乍らも動せぬ光秀山君臣の約をなし奉つりしハ立
身を望武士の本意其時非人を討捨しハ路次の難儀を救ん爲信)イア如何

程よ陳ても慥あ證跡ソレ蘭丸」と渉目配蘭ハツ」と答て呼次よア諾の返事
も間の戸扣へて様子園菊が袖襦姿引替て赤前垂み手拭も額よ一寸
置霜の白書院よア畏まる光秀見より(光)ヤア此方ハ東吉の内室シテ其形が
證據どハ(菊)ア涉不審で涉座せう跡先ハ知ね共斯モせいと囁語て金を
非人よ賄賂し涉參詣の妨げさせ夫から取入手段迄慥よ聞た菱簾の茶
店歌占ひの短冊よ宇治の川霧絶々よ今顯れたる前の巧何と違ハ有ま
いがあ歌占ひの此お園東吉殿の女房どハ次手よ不審を云かへ信長様
の名代よ祇園様へ代参り妾が出茶屋が休憩所茶杓の縁の奉公始め几
帳様の傍月の座所花所都の事の概略ハ能知て居と思ひんせ又其
上几帳様の入込せ殿の首切腰折歌顯れ渡る網代木の歌が證據でござ
んす」と辨舌爽然菊水や祇園のお園が形容よ口を明智が言句も出ず頬
眞赤よ玄よげり居几帳の前も身よ掛る繩目よ浮む涙聲(凡)嘯兄上惡の

報へ目の前よ斯有ふと思し故今宵へ延して下さんせとやせしハ爰の事誠淺倉へ義が立ずバ妾が身を切刻み腹癒よして下さんせと啣歎くを蘭丸制して(蘭)ヤア光秀返答猶豫よ及ぶからハ淺倉が一味の餘黨此座ハ立さぬ何とノと反打て詰寄間も嵐よ連具鐘太鼓乱調よ聞き三度告る聲々(光)何事と呆る明智が庭前へ小田家の定紋瓜の紋付たる赤旗を真先よ高挑燈を押立く神輿を各手よ衆徒の出立様先へ昇据させ次第よ入来る大將分着込よ腹巻小手臙當衣を結んで玉襷き頭に寶冠凜然も勇よ勇む大音聲(柴)軍師東吉の指圖よ任せ山法師の姿よ省し淺倉を欺き渠が奪し神靈の傍箱を奪返し神輿よ納め守り奉つる山口九郎次郎本名ハ明智光秀足下が手跡を誇つて神靈ハ元來義景迄獻山へ僞引寄生捕て歸しと光秀が鼻と鼻突合計引据させ(柴)斯云ハ柴田權六ありと寶冠取捨(柴)汝が頼む義景ハ斯の繩目命惜くば降参せよ如

何よ／＼と呼へりしハ冷眼かりける有様あり、信長悠然と(信)如何光秀
汝を此別業へ引入置跡へ廻つて斯の如く某しが手も下さず淺倉を生
捕事皆東吉が敷へし智謀几帳へ又懷妊あれ共仇する汝が妹成バ我手
よ掛ると薙刀取延透許切たハ件の繩目(信)兄と一所で無事ハ最前篤と
見届た胎内の子ハ我惣領左孕ハ男子の證隨分護身平産せよ」と仁愛深
き恵の程皆々頂を下よける中よ義景無念の齒噛(景)、憎いハ光秀小田
の家よ歎込れ二心を挾む祿盜人計略よ被乗て繩目の恥辱奇怪や」と鈍
足踏で身を急る光秀呵々と笑ひ(光)ア祿盜人とハ舌長あり我武者修
行の其序で汝が國を徘徊せしよ兵術の師範よ頼其上よ小田信長社國に
の仇何卒討て吳よと云受諾しハ武士の一ト夫より兄弟入込しが花も實
も有信長公眼前妹が命迄助け給ハる仁徳よハ中々及向ふ劍ハ無今よ
り實の臣下と成忠勤を盡し奉つらん仇も恨も是限の證ハ是ヲ」と抜打

に水も溜ず淺倉山椒可愛と云人の無りし最期落たる首を引提て光一權
 六殿の取次にて實檢願ひ奉つる」と退去敬ふ明智が本心信長安堵の涉
 思ひ徐々と立寄て神輿の扉押開けば内より出る慶覺法師是も僧衣を
 引替て鳥帽子直垂華美よ袖又捧る神璽の涉箱信長發と恐人(信)ナ光秀是
 社先君義輝公の涉舎弟南都一乘院の慶覺よて渡らせ玉ふ去京都騒動
 の砌此下東吉室町殿の寶藏より伴ひ歸り奉つりしが猶松永が怨敵を
 恐れ津島の社司に預隠し毎夜く妾が許へ通ふと云しハ凡帳を始め
 汝よも深く包む浮隱家よりく浮還俗を進め奉つり今月今宵浮得心
 し故私しよ將軍の束帶を粧ひ源の義昭公足利の浮代ハ万々歳と敬ひ
 深き待遇よ在會人々(各)ヲ發」と一度よ祝し奉つる義昭袂を搔合せ(昭)如
 何よ方々足利重代ニツ引兩の浮旗小袖の鎧慶壽院諸共よ松永が手よ
 奮ひ取たる詮議よハ此下東吉彼地よ赴き不日に吉左右有迄ハ津島の

神社ニ忍バんず早夜も明ハ惡カリあん」と既に涉座を立玉ふ信長暫ど
押止め信某し兼て信仰せし都感神院の涉社祇園會午頭天王ハ津島の社
ニ涉一脉我願望の故有バ絶て久しき祇園會を此悅びよ再興せん夫を
學て是よりも津島の社へ此神輿送り届ける道すがら行列の營みを乞
計ハん此長刀社慶壽院より玉ハつたる三條小鍛治が名作にて几帳が
繩目を助かるも胎内の子の守の名劍縛め切た其謂涉注連の繩を薙刀
で切て通るハ此時の因縁所謂を知する爲蘭丸が真先よ擣たる長刀鉢
神輿ニ附る家の紋瓜ハ愛岩の阿古が鉢二行よ並ぶ犬神人が形ハ其儘
法師武者祇園の守り筒守り笠よ着たハ義昭公諸國の軍勢催促の涉朱
印あり迎賜りしを戴く笠鉢函谷鉢ヘ聲を告る鷄鳥鉢空よ月鉢有明月
館ニ残る信長の義心ハ堅き岩戸山再び起す足利の敵ハ松永亡す先陣
凱陣舟鉢ニ神を諫る市殿ハ赤前垂を緋の袴お園が氣轉菊水鉢几帳の

前操の鏡和光の神力武男の軍又勝重光秀が心一致よ義昭の涉供や出
て行

○道行憂簾笠

式臺の枕詞の數々や倭詞の其中よ思ひの露と書たるハ涙と云ん涉所
其言の葉も今ア此身を知雨ハ簾笠に袖や袂ハ凌げ共凌兼たる世の
憂目都の渉所ハ室町の室の花さへ散失て梢よ殘る一輪よ日影も薄き
輝若君乳母の侍従が介抱よ爰や彼處の隱家も若や敵よ漏月の桂や嵯
峨野の奥山よ知己縁邊の假枕曉き露よ起別れ雲井を後よ落足の浪速
の浦へと心指行足利の公達が渉先を拂ひ後備へ興よ車よ引替て杖よ
り外ハ乳母一人影諸共よ四人連四ツ塚過て鳥羽駿野分の風が微々と
尾花芒が穗に出て招ぐとすれど物言ず誰に東寺も遠隔る道ハ直でも
横大路斜り曲りて松永を思ひ出せバ想しや日頃の巧菅簾を義輝様と

を思ひも寄ず花備が手よ掛て現か夢か命も夏の夜半の霜憂を三好の
存保様同冥途の友千鳥實よ簞さへ恨しと笠も搜操彼處よ捨杖取延て
打々打バ散るてふ色々花の露と乱れて散騒ぐ野面の小鳥が波落々
立や日數も初秋よ向ふの森の宮所再び故の源よ返すくも祈
らんと拜む片手よ若君ハ野を懷しみ里の子が幼稚遊を見馴てや先よ
立てハ頻々走り爰迄傍座れ走り競や隠容鬼鬼のひこぐさ足元も最愛
盛り可愛き餘所の人目よ寶寺爰ハ山崎男山狐渡船も何日の間よ注進
の川舟帆を上て登るもさッさ下る櫓拍子曳さッさ浪の高濱佐太の宮
天満神を神子女のきねが神樂よ吹笛ハ鶴殿も跡よ舌鼓ヨフサヲ
物の被り太鼓よ撥へて賺宥める宇守口松の林の直うと立木ハ敵の松
永がと教ゆせバ打點首小太刀を抜て飛上り片枝を透許是斯と切て落
して微々笑ひ勇よ道も歩りて晒堤の長柄川早くも岸の女郎花野

菊交りよ稻子機織蟋蟀あれも夫乞羨まし夫持ぬ身ハ氣散じよ赤乳離の若君を大事くと渉手を引父を尋て大江の濱岸野の里と聞傳暮ぬ間と思へ共知ぬ道草問人も難波の寺の鐘の聲入日羞明翳す手又尋ね迷ふる(三重)便無れ

○岸野の里の場

「さゆひ参か送りたや見たやサ切て新家の端れ迄^{オツタラキヨ}イナ君が手枕寐よ
社來れ枕遣とハ曲が無^{ナシケラキヨ}イナ祈バ福を多門天蠶蟬の足程參詣の下向
の松の下蔭よ上甘諸白鹽梅好今夜喰ねバ毘沙門のお請が無^{ナシ}口車廻
り取卷コレ此處へ其處へ十文此處へも五文八文呑次第錢次第成世界あ
り直な道でも横よ押火車の小次兵衛迎遠江から遙^{ハルカ}と金催促よ岸野
村莊屋の持兵衛打連て行向ふより供人引連松永の代官十河軍平夫と
見るより土よ手を突(小)渉代官様へや上ます只今渉役所へ參つた所渉

他行たゞと聞歸り掛途がけ中乍ちうながらの涉願ねがひさきだつ先達さかだつて涉願あげ上あがました岸野村の藥屋せきや是濟さいへ金高九百三十五兩の出入いりり其節相手あひてよハ手銃てがねぢゅう仰付あひつけられ則すばち明日が三十日みそかの切日何卒濟くわし吳よます様偏やうひんよ願ひ奉まつつります遠州から旅掛たびかけの物入宿ものいり貰飯代めんたい小遣こづけひ等とう毎日まいにち酒肴持さけうけ、是々これく小次兵衛殿此庄屋を毎日まいにち引摺ひきずりてハ步行あるきやるが何日吞のましやつた事が有ある(軍)ヤ黙だまれゴリヤ小次兵衛凡およそ金銀の利足りそくよハ大法たいほふが有物法あるものほふよ過はた高利かうりを懸かかたハ上あを恐れぬ惡にくい訴うつたへ然さるニ因いて是濟よハ手銃計ぢゅうけいり閉門へいもんを免ゆるし商賣しょうばいをさして置おいた明日ハ役所へも横目役人よこめが參まゐられ公事こうじ訴訟そしよの是非ぜいひを聞きと有其節事ありそのせつことが分わかるで有持兵衛ゆうじへいえ扱さわ先達さきだつて吩咐ひふけた室町家の落人男女おちうそよ限かぎらす見付みつけ次第しじ疵きず付つけぬ様生捕ようせい注進しゆしんせバ裏美ほらうの金のぞみハ望次むちう第だい村中末すゑ々よ至る迄此旨き度ど云渡いわせせ早行はやひけくくと云捨いひすてて道みちを急いそげバ小次兵衛こぢへいえも庄屋しょうやを連つづて立別りべつれ行ゆも歸かるも逢阪まつさかの水みずハ澄すみ共濁世よ形なりも泥坊どろぼうが二三人松蔭まついんより搖ゆるぎ出いで(三)ナントお頭かしら

今のを聞か頭オサゼ金の攢取今夜ツブカタリ此邊コラよ巣スズを張て落人臭オチニミコトい者有バ漂ハカル
 ぬ様ヤウ木コリヤ三サンよ勘太ヨクタよ我等ガタハ合法ガフが辻ハラの方此木藏ハシモツハ此邊宵覗アタリヨヒして後
 ミ出合ガタふガタ、合点ガツテンと點首ヅキアヒ北ヒタチと南ミナミへ別行ハカラク上甘アゲハやハ伸欠ハクス新シン、代官殿ダイカンが
 入來カタマリので參詣カタマリハ皆脇道カガタカチへ是シテハ水ミズも呑ノルぬと諸手モロを組ムツルで一思案シアン新シン、又
 人顔ヒトガタも見られぬ様ヤウ手拭ハツボリ透許スラバツ頬カホ被ハシブり面マスクを被ハシブて袖乞カツギの又人ヒト通りドリを待マツ中
 に爰ハシメへ岸野の薬屋の一人娘ムネコお露ヲロとハ靈リの情モチを懸食スルミも神ミよ祈モルりを只
 一人行道ウヂ追ハシムて新コレナヤ涉繁昌様ハシマツヨシの涉參詣ハシマリ一文モノ取ハシムして(露)ア、是シテ下向カタマリよ
 遣ハシムふ付ハシムやんあハシム新ハシム付ハシムあハシムと涉ハシマリ仰ハシマリる様ヤウな涉身ハシムシ跡ハシマリで(露)ア、コレ玄カタマリつこ
 いハシムと云ハシム跡ハシマリから下向カタマリが散ハシマリ々來ハシマリるを見て又引返ハシムし上甘アゲハや面押脫ハシマリで(新)コレナ
 と聲ハシムを懸ハシムれバ立止ハシムり下ハシム何ハシムぢや我が事ハシム新ハシムイ涉無心ハシマリあがら是ハシム何ハシムぢや
 一寸ハシム見て下ハシムさりませハシムと渡ハシムせバ紙ハシマリを押ハシマリ披ハシマリき下ハシム、何ハシムぢや、是ハシムや人參ハシムぢや
 新ハシム只ハシム今ハシム拾ハシムひまハシムした人參ハシム此ハシム様物ハシムかハシム然ハシムも大人ハシム參掛ハシマリ目ハシムも大方ハシム四

五兩あら安ふ取ても一兩で百七八十匁^{コリヤ}餘程^{よほど}あ金目^{かねめ}が有^新^ア夫あら
何卒か前買^カて下さりませぬか^{(下)イヤ}我^{おれ}も入ぬが^(新)高が爰^ひで拾^ひふた
物^{もの}捨賣^{すてうり}致^シしますニシヤ左様^{いは}云^すと能程^{よいほど}付^てて買^て下さりませ^(下)然^{され}バ
あふ夫^{あら}掛目^{かけめ}ハ何程^{なんば}有^ふと小判^{こばん}一兩是^ぜで負^{まつ}るか^(新)ヲ^ア扱夫^{さげ}ハ餘^{あま}りぢ
や小^こ一貫目^{いつくあんめ}もする様^{やう}云^ふてから如何^{いか}よ根^ねが無價^{むがい}ぢや逆^{さわざ}左様^{いは}ハ賣^うぬ外^{ほか}
へ見^みせう^うと行^ゆを引^{ひき}留^{とどめ}(下)ヨリヤ能^{のい}ハ二兩^{りやう}で賣^うか^(新)イエ^イ(下)夫^{そん}なら今^{いま}一兩^{りやう}是^ぜで
三兩^{サンロウ}手^てを拍^{うそ}(新)モ機會^{はづき}が能^{よし}負^{まけ}もせん^しと互^ひひよ左^さやん^んく^く(下)ソレ三兩^{サンロウ}(新)
ヨレ人參^{ヒトツン}と取^{とり}替^{かは}し仕^したり顔^{おもて}にて別れ行^ゆ新^{ハハハ}、扱^{うそ}も旨^{うまい}い物^{もの}客^きが付^た是^ぜで
都合^{つがふ}是^ぜ程成^{なり}や元銀^{もとかね}ハ慥^{たしか}よ有^{ある}、有難^{うれ}や是^ぜと云^ふも日頃念^{ねん}する吾孫子^{あひこ}の觀
音^{おん}様^{よう}と毘沙門^{ビシャム}様^{よう}のお蔭^{ごん}傍^{そば}眞言^{マニダヤツクワ}ムハナシズシチ畔^{あぜ}道^{みち}を虛^{うそ}々と戻^{もど}る木藏^{キザクラ}
が鶴眼^{トリメガコ}(木)ゴリヤ^{うま}旨^{うまい}事^{こと}ひろいだあアドレ上前^{うはまへ}せう^うと手^てを出^だせバ^(新)ア上前^{うはまへ}と
ハ何^{なに}の事^{こと}(木)ハ隠^{かく}すあい今^{はたら}働^{いた}小判^{こばん}の上前^{うはまへ}手^て短^{たん}み云^ふて聞^{きか}す我^わハ

すの木藏と云て此海道で顔の賣た粹方ぢや意地無地云すと早ふ出せ
(新)扱ハ涉粹方でござりますか私しハ此様な怖い事商賣よハ致しま
せぬ金が無れば成ぬ事で思ひ付た今の一隻一度重ねてハ免も有れ今日
計りハ了簡して(木)吐する金の欲ない者有ふかサ小言云すと出居
らぬか(新)サ出度ても遣度ても身よ付る金ぢや無い大事のく主人の
爲不圖した出来心モウ何卒涉堪忍そんだけいよ貴方を譽た狂歌が有聞
て下さりませ住吉の(木)、住吉の(新)松ハ貴方よさも似たり直あ様でも
曲まねハあしナント能か(木)知ぬハい何所に夫が譽たのぢや人を嘲嘆虛路
松めサ出し居れ出さぬとは是ぢや」と引抜強刀(新)レ人殺しく「出合く」
と聲立ても四方に人影霧閃刃お露ハ斯共下向道戻り懸つて顔と顔(露)
其方ハ新(新)ニ、是々成程新前商人でお前の方へも往た故よ夫で見知
てござりま玄よナ爰ハ危険早ふお歸り(露)サ左様あれど此体ハ行合の

口論かコレ何かへ知ぬが涉了簡(木)「こなな」和女此奴と知己か此奴が街ひろ
いだ故上前分與みや代官へ引摺て行女の知た事ぢやあし(露)「サア」夫へ左
様で有けれど爰へ妾が詫言「ひきす」手を合す涉了簡(木)「ハラ」縹諱「レーハシ」謝言も無價
ハ成ぬ粹方と名乗掛素手引てへ仲間へ立ぬ(露)「サア」夫道理然乍ら私しよ
も出合た云掛物參り故金ハ無れど持合せた大事の櫛是あと詫よ」と手
を上げて(露)「ハラ」頭に差した櫛が無いテ「サレ」あんようあ」と云つゝも懷中からお錢
二筋(露)「ハラ」何卒是で」と指出せば物をも云ず引奪り(木)「ハラ」酒價の事へ扱置て
煙草代でも無れ共了簡して往でこそ仕合者め」と睨付元來し道へ立
歸る。お露へ後を見送て(露)新作此様怖い所は居たら何様ある目よ逢も知
ぬ日へ暮る人氣へあし誰憚らず連立て嗤し度其譯へ此中度云た事
年端も往ぬ形をして親の難儀も辨へず行過た色詮索懸徒らあ娘ぢや
と思やるも恥し乍ら惚たが嘘でも無上より小次兵衛が毎日来て何でも

妾を女房とする金の代より連て徃ると阿陀忌らし聞とも無い下地より心を懸て居る貴郎が妾よ應と云返事する氣よ成て給ると新作殿へ妾か男と心で心が體よ成サ好返事聞せて」と戀よ孝行取交て二ツの袖より置露のお露が心ういぢらしき。新作も涙ぐみ新家來の私しを平常から涙不便懸て給へる上涙主様よ惚らるゝを微塵毛頭忌で無れど涙恩を請る旦那の涙難儀明暮見て居る愁さと云ひ小次兵衛めが憎て口催促仕居る頬かまち握拳ハ振上ても那方ハ金で面張居る其借金を才覺して旦那の無念晴し度何がなと思ひ付今日ハ毘沙門様の縁日參詣を心懸上甘賣の荷を借て賣て見ても五文十文持の徃ぬ摘み錢是でハ濟ぬと又外に種々の儲事夫よ忘れて居たお前が先刻よ參り掛私や面を被つて顔隠し一錢下され云機會抜て取たお前の櫛と荷箱の中から取出せバ(露)オ、瑠璃の此櫛ハ京よ涙座る姉様が父様へ文の序でよ下さ

つて大切よ思へども是代成て父様の難儀を救ふか金の足よ(新)「是賣いでも大方よ此方で用意が出来ました矢張是を」と正直の頭よ宿す
(新)コレ此櫛何のくしく案じ成るゝ事ハ無い旦那様の手錠も緩む袋様も渉合點あら其時こそ能く返事夫迄ハ隠すが秘密人の見ぬ間にサアか歸り私しハ此荷箱元へ戻して跡から」と云ふお露も欣然と(露)夫なら家で待て居よ早ふく」と云替し心残して別れ行(新)ドリヤ明空の此荷箱戻して往ふと振擣げ行手の先よ百姓共各手よ荒繩棒折木(百)ソリヤこそ見付た上甘め縛括れと追取卷(新)、是々商人捕へゴリヤ何する百)ヤ何するとハ胴摺め匱人參の押付賣小判の三兩銘め」と云バ傍から同音よ(百)我が裏に乾て置いた桔梗の根を取たも汝ちや(新)サ滅たる事云玄やんあ匱も眞も相對萬ひ(百)夫あら盜んだ桔梗の根ハ(新)サ夫ハ(百)イタ物云すア銘めと多勢よ一人詮方も泣も詫るも聞入ず荒繩掛の棒縛り幸ひ向な松の枝稻

村の藁積重ねがんじ揚みの引張蛸号吐るかと込藁を口よ喰せて(百)ア
 能へ直よ火を掛焼殺す(百)イヤく滅多ある事をすあふ代官へ斷つてお指揮
 次第が宜らふ(百)是や道理サア來いと皆打連て走り行。次第又更る夜嵐
 よ傾く月も薄雲り身の明りさへ晴ぬ夜は不便あるか新作の物も云
 れず身も暗ず儘く物の兩の目よ涙波落々遠近のたつきも知ぬ旅
 憂き勞しや輝若君侍従を使り力草漸くよ迎り着従マアく此所で暫く
 と草折敷て足休(從)ヤく此跡の大坂と云在所で問たれバ岸野の物へ
 もマア一里歩行も馴ぬ涉歩路疎か足が痛みませう乳母が負て上ます筈
 却つてお前よ手を引れ逆様あ涉介抱涉免されて下さりませ(若)イヤ
 乳母我や歩くのが面白い其方へ又足が痛か摩つてやろ氣が悪か薬を
 吞や其方が今煩やるとノ我へ何とせうがいのと打涙ぐみ給ふよ(從)
 お能仰玄やつて下さります乳母へ何所も悪くもあし煩ふ事ぢやござ

りませぬ玄たが持病の癪が胸先へヨレ、其等より水が有あらバ只一口
呑して給(たべ)若(わざわざ)、爰よ音がする」と草押分て兩の手よ掬へぞく 波落く
と残るハ露の玉きはる後の哀と知ぬ子が幼氣な手の濡粟口へ入るハ
(從)ア、嬉しや氣がはツきりと成ました」と若君の傍顔を熟^ハくと打詠め(從)
最愛はや時世迎足利の渋物領輝若君の渋手づから水を給へる有難さ
定めあき世の中や果報と云も暫^ハが中苟初のお遊びよも玉の興^ハよ輦^ハ
と持侍かれ給ひし身が今ハ野狹の草の上綾や綾子の菌共錦の夜の物
迎ハ此乳母が膝の上廻^ハや夢よも現よも昔の玉の傍殿共思ふて傍寢ある
お心が一倍最愛^ハござる」と膝に引寄抱き締人目も知ず歎きしが漸^ハ
よ涙を止め(從)コレヤむ前ハ怜俐^ハ生質今乳母が云事を能お聞成れま
せ此行先ハ妾^ハ親里何卒其所迄尋ねて往たら氣遣ひ無れ共惡人の
蔓延世の中万松永よ目付られお前も妾も別れくよ離れまい物で

も無い然すれば命も不定の世界雖ふても義輝様の涉公達假令敵の擒と成乃の下よ直る其卑怯を最期を遊ばするへ敵の名も尋ねた上西の方へ手を合せ南無阿彌陀佛と仰しやると極樂から父様が迎ひよか入來成れます必ず忘れ給ふな」と云聞されば打點頭(若)お忘りやせぬ能覺えて居る極樂と云所よハ父様が傍座るあら往て逢の嬉しく夫でも我一人の道を知ぬ乳母も付て来て給」と辨へ知ても頑是無き未稚子の憐しき聲(從)、乳母も付て往はいの」と膝よ抱取抱締て泣音よ專野の末の虫も哀を添みけり、聞耳立るをすの木藏礎の三よ囁き合勘太が火繩打振く(木)室町喫い伽羅喫い」と前後より引狹み(木)女中長たらしい愚痴語お觸の有たお尋者金みするのぢや歩め」と手を取バ振拂ひ若君を押圍ひ(從)、是よ妾や其様者ぢや無い住吉參りよ日を暮し足ハ勞れる勘(ヤア)吐すあ只の人あら着張た物を眞裸此小兒めを人質と立

寄勘太を取て突退嗜つきのけあむ一腰拔放ひきこしぬきはなし寄バ切んと身構みがまへたり(三人)ノヤヤ拔
たハ」と三人が各手よ晃然威きらめくよどいの刃侍從やいばハ若君確定じつかと抱相手だきあいても撰ならばず切
結ぶ女と思ひ悔りし三人玄あんかあの應對あいだいを切立きりたてく(三重)追すそて行。切合透すき
を駆抜かけぬけて木藏木ハ跡跡へ立戻たまる(木)女めハ二人に任せ小悴せがれめを捕とらへん」と其
所そか此處こゝかと駆廻かけまわり褒美ほめの金よぎろ付目玉又引返す其跡あとへ輝若君てるわかみを
見失まつひ尋さがる侍從しゆが數すヶ所ごの傷きず流ながる、血汐ちしほ血けの涙なみ(若君様輝若様此筋すぢ
を真直まっすぐよ住吉すみよしの方へ傍出そびで、返事かへりの無ない最逃もろにげて下さつたか但ただしし切れハ
成れぬか若君様輝若様てるわかみあふ(二人)よ、爰りやうよ」と兩方りょうぱうから聲こゑを音便おとよさせッふ
りと切きたと思おもふた盜すりと盜すり相見互あひよひよ撞許うつりきと轉まわふを透とおさず乘掛のり(從)切
て汝あれを腹癒はらゆ」と二人を一度に寸斷すこぎりく(從)ア、嬉うれやく本望ほんまねや是これよ付はて
も若君様輝若様てるわかみハ何所なよ」と尋たずる侍從しゆが露あの身も夜半の嵐よまきよ吹送かざる斯か
共知ともしらすの木藏木莽ぼう眼まなこで息急いつきゅうき木木ヤ是これや女めも鑿くつたか何どうでも悴くたばハ

隠て居ろ」と虚々虛路へ松の下薬引退て(木)ゴリヤ何ぢや」と透し詠むる星
 明り(木)ヤアゴリヤ宵の上甘め物を吐せ」と込薬取バ(新)此方へ彼大將ぢやの
 ヴ、悪い事へせまい物貴方より分れた其跡へ百姓共が大勢来てヨレ此様
 よ捧縛何も彼も見て居たが褒美を積山けなりいはいの(木)エ、何吐すぞ
 い女ハ麁る小兒めハ居らず手振さて莽付はい(新)コレ居ぬ奴を尋ね
 ふより此繩解て下さつたら其禮よ我が取た小判を貴方より進ぜふ」と云
 ハ耳寄覺えの金手早よ繩を解ほぞき(木)ドレ金渡せ(新)イヤ爰よ持てハ居
 ねアレく松の枝の直と上へやんまひよいと隠して置た上り度ても手足
 が痛い何卒貴方が(木)合点と松の荒皮手掛けに登るを見濟し捧追取
 批り情も打惱せば眞逆倒(木)ゴリヤ何する(新)イヤ何する所か斯するのぢや
 能殺さふと仕居つたあ」と云てハ打据批据(新)我が代より成をれと我括れ
 た棒縛元の松へ括り着葉も一つに(新)能似たく似ぬ所へ汝が頬幸ひ

爰より先刻の面すつぱり冠せる折こそ有松明打振百姓共見付られじと
新作へ後へ密と隠れる共知ねが佛の煙より(百)上甘賣の盜人め代官様
の傍意が出た土地の法よサ行へ生あがらの火葬^アと發と燧立煙の隙
先へ抜出る上甘屋此場の首尾の鹽梅好舌打してこそ(三重歸りけれ

○是濟住家の場

蘆火焚なる難波よも住バ住あり住吉の海道筋の離れ庵本家是濟和中
散定價ハ一ふく十二錢買て往れば又跡へ買よ岸野の所柄店も奇麗あ
構あり女房娘諸共よ店を手傳ふ下男新作と云氣輕者つかく傍へ立
寄て(新)鬧しい店の片手何成るゝと思へば毎年のか備物早今日でござ
りますか(ヒ)サレバ何時もは是濟殿が切刻で備てあれど那様よ手錠の難
儀夫でコレ此様よと飯匙取々土器も新よ三方熨斗昆布注進引榮し床の
上何か白木の箱の前添々敷も備る折柄庄屋持兵衛が門口から(持)親仁

嘸待てい有ふと云跡より火車の小治兵衛が(小)何の侍兼も仕やるまい
 何ぢや有ふと今日が絶躬絶命ア連立て往かふとそつてふ聲の氣の毒
 さ(露)アお茶一ツとお露が氣轉指出す手を玄と取(小)レお袋此間から
 云通りお娘を女房下さりやノレ此是濟の舅大枚の金もするゝ證
 文も戻して遣(サ)お露返事へ何ぢやと抱付を新作中へ分入て(新)成ね々
 ヲ左様(カラ)成ぬ(小)ヤ汝が何知て引込でけつからふ(新)ヤ引込ま
 度指でも指て見よ腕節はきく打惱す(小)ハ、大枚の金を濟さぬ故
 連て往るのぢや(新)、其大枚の金戻さふはい(小)ハ、脊中冗た親仁
 さへぎちぐする借金汝何金の宛が有て(新)見せうかと懷中より包
 解いて小判の數(新)一二三四五六ノレ愛取と云ふ呆れる母娘小治兵衛
 顔眺め(小)是で最無か汝是や只六兩(新)サ其元金を出した云分が(小)
 無ての親仁よ貸たハ小判ぢや無い賣金で六兩小判よ直すりや賣金一

兩が七兩二分夫よ二割の利足を乘八年以來元利合せて九百九兩閏が
三月で二十七兩二口べて九百三十六兩何と膽が轉覆返るか夫よ小判
なら只六兩銀目み直して六々三百六十匁能へ取ぬより増ぢや内上み
取てこまそと紙入へ入たが引残つて九百三十兩何とお露を女
房よせうと云が無理か開た口が閉がれまいコレお娘未手入ずのはつと
り者手付よ一寸口々と綢繆掛る後方へ突然親是濟手銃乍も小治兵衛
が首筋取て引戻され(小)何奴ぢやと振返り(小)是濟是や何仕やる(是)
如何も致さぬ金の替よ娘を遣て是濟が顔ハ何所で立那妻子ハ義理有
中夫知乍ら無体の仕方先夫小兵衛殿龍雲の位牌へ何頗下て手が合さ
れふ重て云んあ得心あいを女房娘も案じるあ高が借錢で首の落た例
もありと空廬いたる岩疊作り(小)親仁手強ふ出やつたのよい大
方今度の水牢へ入てこます親子篤と暇乞してサ姓いと鬱悶腹よ立上

り具濟を先へ打連て出行跡又主従が溜息はツと母のかヒ(ヒ)新作此間
 每日毎夜戻り様の遅かつたハ金才覺の爲で有なか左様とい知いで癡
 漢め蕩子めのと呵たが恥かしい堪忍して給コレ手を合す是で湛納して
 給」と兩手を合せ拜手又懸る涙ハ親と子が誠ハ涙又顯せり(新)是ハく
 勿躰あいお露様も同じ様又何の是がお主ぢやもの家來ぢやもの疎末
 よして能物かヤ何か又紛朝飯も未だ有茶の下を焚付ませう其間又店
 の前へお露様も俱」と云捨勝手へ入折節門よ嘈々聲ト打よ擲と取
 回す子供が中より輝若丸乳母の侍従が生死さへ知ぬ道筋迷ひ子の目ハ
 泣崩て只一人(若)子供も胴慾ある事云ず共乳母を見失ふた程に何卒尋
 て吳やい」と宣ふ聲も惶々涙中よも子供の大將が(子)泣はいゝ形ハ
 小いが恐らひたんぢや擲往せ追返せ」と一人が云バ口々よ振上る杖の
 下(若)推參な科も無者を何で擲く其杖當たら此太刀で片端から切て

「退る」と反打玉へバ(子)面白いサア切くと惣令が中より輪と巻さつばおヒハ
見兼門み出(七)笑談かと思て居りや只一人を大勢して双方よ疵が付て
も悪いと引分れ共聞入ず(子)那小坊主の迷子さふあが頭横柄よたんを
切居て脇指で切々と吐す故切れふと云事ぢやサア切々切て貰ふイイ
て追徃せ／＼と杖三昧(七)コレ危険／＼其様よ擲たら妾が替て擲
て遣と杖掠奪追廻せバ(子)其や社ある薬屋の婆が起たゞ遡よ／＼と皆散
なり仍も冷いや危難と熟々姿を打詠め(ヒ)真よ變つた衣類着子ぢや祭
の練物よ出やつた子か(若)イヤ知ぬ(ヒ)、住吉のお社務様のお子ぢや有
(若)イヤ知ぬはいの(ヒ)左様でも無か先刻よ聞バ乳母を見失ふたと云つ
たが何でも迷子よ極つたマク此方へと手を取バ少へ力を得玉ふ思ひ
其處ら莽を見廻して何の遠慮も荒薦の注連縄張た床の上儼然と坐て
在しますおヒハ興覺お露を招き(七)那衣裝付爪はづれの尋常さ何様で

も由有子ぢやさうあアッ誠よ此間お觸の有た室町とやらの落人ちや有
舞かいの(露)然ぱいナ日外も父様の被仰みハ京よ居娘のお智惠がお
越た櫛ぢや其方が爲又も姉ぢやと思て吳と此差て居櫛を下さつた名
も變たと聞たれぞ六ヶ敷名で忘たが今室町とやらよ宦仕乳母くと
云のが姉様あら父様を使ひ涉入來も知ぬ餘所乍ら篤りとお前が問ふ
て見しやんせ(ヒ)、左様せふ」と立寄て(ヒ)コレく小さい子の事成バよも一人
ぢや無筈お乳母殿よ未大勢供でも有たか(若)イア知ぬ(ヒ)左様して何と云
所から何と云所へ往のぢや(若)イア我や知ぬはいの(ヒ)サ向ふの所ハ何と
云所で誰が所へ往のぢやいの(若)サ住吉の方ぢやと乳母が云た我や何
よも知らぬく(七)サよア知ぬくと計云ハいの(露)イア母様那マ床の
上ヘ鎮と直つて行儀の宜事を思へバ如何でも合点が行ませぬ妾が問
て見ませふ」と衿繕ふて傍へ寄(露)見バ只成ぬお子ぢやが若京の方から

出て此津の國へ何處を心指て涉入來り有の儘よ云しやんしよばか
爲ふも成ましよ」と優艶よ尋ねれば(若)、能問て吳た京よ居時の大分供
も有た爰へ來時の乳母と只二人來其乳母が昨夜から見えぬ故尋ね
行道で今の様み子供が、乳母が來給らぬ故子供ぢやと思ふて侮られ
たが腹が立、口惜いくと小太刀の鐸を打叩き無念涙が傷へ敷。何の
心も劈いて茶碗片手よ新作が若君を見て胸りむ七が後よ身を縮む(七)
是へしたり那人の何を胸り(新)サ那の子を見る(ビ)、那子が何卒した
かや迷ひ子の可愛さよ只た今此内へ(新)、夫で落付た我へ惡ふ合点し
て昨夜の尻が來かと思た其時那子ハ二人連で危難目よ逢ふどしだが
能通て來事ぢや」と云つ、傍へ(新)モ結構な衣類着居の开して足ハ泥染
け昨夜から直成何よも喰せまい飯でも握つて遣か(若)ヤク其様事ハ我
や知ぬく大分よ空腹あ早ふ膳を持やい(新)サ左様ぢや有ふと思ふて

問のじや握飯が否あら茶漬でも(若)チ、茶々よ漬て早ふ持(新)チモ横柄あ小坊主ぢや幸ひ盛て置たが有」と勝手よ入て持て出る菜よハ事を缺茶碗猶ハぬ箸の据振を見るよりも氣色を變(若)ナ下郎よ此様賤しい膳でハ否ぢやド」と不興(新)扱も伴るハ喰とも無バ喰ぬが宜」と忿怒をおヒハ心得(七)ヨレお露先よも其方の挨拶が氣よ入た機嫌直すハ其方ぢや」と云含れバ(イ)床よ備へし三寶の塵打清めし据振よ荒爾と打笑給ひ(若)ミ嬉いゝ京から迎が來た時此通云付て知行を澤山取さふア」と機嫌能に箸取しが(若)如何やら最眠度成たと勾交り又目を摩々輝ニ、乳母ハ何故又お入來らぬ寢度ても一人ハ淋い乳母やい乳母」と頑是無寢覺よ慕ふ乳離を思遣つゝ母娘(ヒ)道理ぢやゝ目上の浮腫たハ夜の目も碌に此まア足の汚たを濯いで遣ふマ奥へ(若)夫ハ嬉い(露)サア早ふ」と遠慮泣子の手を引てお露も俱よ入よけり。店よ點然新作が小首傾け思案

顔(新)昨夜慥よ見た輝若代官が云れた落人連て往て褒美を貰ふて旦那様の難儀を救へば、左様ぢや」と立上り(新)思へば又愛憐ひ事でも有」と暖簾の透間指弔き何にも知らずよ鹽の中よて燒へて居(新)我がでゝ涙が貢泣をさし居たと目を摩擦り(新)イヤくく差當る旦那様の難儀背中に腹我一人往て左様ぢやくと尻引緘役所を指て走り行。夫との知ぬ母娘汚を清め参らせて(ヒ)據へ是をと湯風呂敷(露此済守へお肌)と取々又介抱し(ヒ)知ぬ事迎先刻よから小坊主ぢやの何の彼の慮外ハ済免下さりませ今奥で被仰つた義輝様の済若君輝若様其父様ハ矢張都々在ますか(若)父上ハ松永と云悪人が殺して京の屋敷ハ最無(ヒ)夫あら母様でも済座りますか(若)母様ハ遠から無坊を可愛がつて下さつたば母様が有たが是も松永が方へ往ぢやんいのふ乳母と二人來道で誰ぢや知ぬが遣ぬくと云た故我よへ早ふ遡と云て乳母が跡で切合て

居やつた日へ暮る道へ知ず草の上や人の門で夜の明るを待て居た此様よお入來ねハ如何した事ぢや」と目も憚々涙含たる物語聞よお露が（露）ナフ母様姉様の傍座る所へ室町館が無と被仰るからハヒサイ是濟殿が聞てあら大抵の案じぢや有まい乳母くくと被仰るのが其お智慧殿ぢや有まいか（露）誠ムナア昨夜の譯を知たと云つた新作見ム遣ふと尋ぬる門前（軍）捕たくと先走所の代官十河軍平同勢引具し追取卷（軍）義輝が忘筐輝若と云小悴一人此家又置ひたる由注進有て慥ミ聞繩懸て渡か但し踏込召捕ふか返答聞かんと呼へつたり親子ハ驚ろき若君を後み隠しヒ左様ある方を匿まひし覺え無い外を詮議と云はせも立てず（軍）ヤア隠すましい慥あ訴人の證據ハ是れと一通を取出だし（軍）藥屋是濟が下人新作トナ者よてシ義輝の一子輝若丸私くし方又匿まひ注進ナ上シ浮賞興の金子を以て主人是濟が借金償のひ度存じシ聞私くしヘ下

し置かれひへい有難存じ奉まつりひ何んど是れでも辨論か新作め
身が歸る迄の人質又殘して置たサ尋常よ渡せくと退引成ぬ訴人の
證跡シヨウセキ親子が詞さへ泣も泣れぬ手詰ハンドツなり稚チけれ共若君ハ乳母が數へ
爰ありと惡びれ玉ふ氣色も無ヒツ二人の衆強シテい世話よして玉つた西
ハ何方ぢや數カウて玉」と有けれど(七)エ、そりやア何故お尋成れます(若)サレ
昨夜乳母が云るにハ松永が世と成バ行先々ハ敵の中若追手が懸つて
別れくに成迎も賤しい卑怯ヒキヤクあ最期サイヒをする敵の名も問た上瀬よふ死ぬ
と云て西の方の極樂よハ父様も往て渉座る手を合し拜むと父様が迎
ひみ渉座るげる夫で極樂の方を問へいの(七)タ、扱もく能覺えて其様
よ辨カキマへの有程猶最愛ナホイシはい千年も馴染ナシムだ様よ思ふ物何と是が渡されふ
初から呼入ずバ此憂目ウメハ見まい物と泣凋ナキシボるれバ(若)タ是其様よ泣やる
ので如何やら我も悲し成たヤ待よ義輝の子が卑怯ヒキヤクな事を云と笑ふな

繩で縛ぬ其前よ今一度乳母の顔が見度乳母よ逢して吳やいと慕ふ子
よりも慕へる、乳母へ此世を秋の草枯萎とへ知ぬ予が尋ね迷ふぞ可
憐しき(軍)ヤ面倒あ諱言障取てハ妨げ有んと駆入て(軍)ホツ綾の上着よ相
の袴相違無と引立く(軍)小兒めが覺悟の爽然身ハ松永の家臣十河軍
平と云者尋常に手を廻せと玉よりけある弱腕用捨も繩目に取着親子
踏退蹴退引立る(若)コレ坊が往た跡へ乳母が出て尋るあら花を見み往
たと嘘吐て泣やらぬ様み欺てやと舌も廻らぬ離鶴を鷺の蹴爪の一撃
み小脇よ抱へ逃散よ役所を指て立歸る。斯とハ白髪の親父同士是濟を
送て庄屋持兵衛(持)是ハ二人乍ら何泣てア水牢と思ひの外又三十
日お預けぢや手錠もコレ打替てぢやは是濟殿も何悄々皆悅んだが能はい
の真よ忘れた其戸板早ふくと昇据させ(持)飛田の道端よ有た死骸是
濟殿の頼みと云村の危介助る爲皆を頼んで持して來た跡ハ其方で能

様 よ ゴフ 借 錢 も 濟 様 よ サア 合 點 カノ 皆 で ざれ く」と 引 返 す。人 間 を 待 兼 母
娘 (七) 心 懸 や 氣 遣 ひ」と 頗 て 死 骸 よ 立 懸 見 と 見 知 ら ぬ 顔 像 (七) 若 や 今 の 若 君
の お 乳 母 殿 カ (露) 但 ハ 京 の 姉 様 カ」と 憐 や 聲 よ 尋 れ ば (是) さ、夫 社 京 よ 居 た
か 智 惠 が 死 骸 や や (ヒ) ヤ」と 恂 り 呆 る 母 (露) ゴレ キ 妾 が 爲 よ も 大 事 の 姉 最 愛
や あ ふ」と 泣 迷 ふ (是) ヤ ゴリ ャ 女 房 今 云 た 若 君 と ハ 誰 事 乳 母 と ハ 何 が 何 と し
た (七) サレ 大 イン 室 町 殿 の 若 君 輝 若 様 迷 ひ 子 と 成 只 今 迄 お 一 人 況 在 た が 注 進
し て 興 賞 を 貰 ひ 小 次 兵 衛 方 へ 濟 さ ふ と 新 作 が 訴 人 よ 往 て 代 官 様 が 繩
懸 て 其 若 君 を 況 最 哀 や 乳 母 ク と 泣 憐 て 況 在 た 物 最 少 と 早 い か 遅 い
か で 驚 な 愛 め を 見 ま し た」と 語 れ ば 是 濟 が 齒 を 噙 切 (是) ハ 仕 成 たり 残 念
や と 我 身 の 手 錠 を 打 詠 悔 涙 の 目 を 敷 膳 (是) カ 新 作 め が 訴 へ も 主 を 思
ふ 忠 義 の 道 是 迎 も 呵 ら れ ず 爲 事 成 事 皆 逆 様 然 ハ 云 乍 ら お 智 惠 が 死 骸
生 鈍 物 の 刀 斧 敷 ケ 所 成 共 急 所 ハ 外 れ た 呼 吸 よ 通 ふ 六 脈 未 だ 切 ね バ 大

明流の秘方を以て一度物を云せて見ん」と店より陳列し薬の簾笥引出明る途端より透許抜たる手錠ふ露が見付て(露)より父様お手が自由より成ますか」と云ふ是濟も(是)ヨリヤビ如何ぢや今日打替た此手錠役人の心有てかシ何よもせよ秘密の薬是あんめり」と死骸より立寄喰切る歯を押分て吹込み又筋骨忽ち蠹く秘術耳際より口指寄(是)ヨリヤお智慧やい(露)姉様イあふお智慧殿と親子が取々呼生る聲に勃然と起上り(從)逃さぬ遣返せく」と駆廻りく(從)輝若様若君様イなふ」と云てハ失意踉蹌足元(是)ヨリ氣を揉まないと抱締く(是)ヨリヤ智惠よく爺ぢやハやい心を體よ氣を爲發ど氣が付たか何とぢやく(從)ニ、其様りやお前ハ父様か實に、父様ぢや嬉や(ヒ)ヨレ妾ハ母ぢや(露)妹で坐んするお心體よ持て給」と力を付る介抱よ苦き息を發と次(從)父様の所ハ爰かへ(是)ナ、爰よコレ息才で居ひいやい(從)添けあいく落付た若爰へ六ツ計(ばかり)の子ハ見ませあんだかへ(是)

お見たく今奥ですやくと、(從)夫あら寐てかへ(是)寐入て傍在る
氣遣あい(從)嬉しや厭邪を引さぬ様よ。何を置いて下さんせ(是)合点ぢ
や親が預つて居るへいやい姉輝若殿と云へ將軍義輝の若君で其方
が乳で育たか(智)左様ぢや無く(是)左様で無と何方の子(從)那へ
妻が血を分た子ぢやへいあア(是)ナム(從)胸りで傍座んせうふ前又別
れ京へ往て三好の家へ奉公の其内修理太夫存保殿よ思へれ設た子へ
ノ輝若折しも室町の御所傍臺様も傍男子を設玉ひしが程無若君よ
お死亡血の上の事あれば傍臺様へお知せあく祖母君慶壽院様のか
指揮で那子を直よ養育取義輝様の傍惣領と傳く中傍臺様よも產後の
養生叶へずして終にのお果遊ばし其時妻を引取て名を侍従と改めお
乳み付育る月日も傾く傍運松永大膳が心變り義輝様も人違ひで敢あ
い傍最期存保殿も同じ日み松永が手よ最期のお供室町のお館も散々

と成果て那子を連て只二人父様の在所を便よ來道で待ひでも有事か
盜賊の大勢爰を大事と防げ共多勢又一人の女の手業何で命へ續くま
いナフ苦や絶難や」と身悶急れバ(是)ヨリヤ「此親が娘ぢや無か是程の疵よ
心後れな今迄とハ違ふて親が付て居はい(露)姉様死で下さんす(ヒ)
母も傍よ居はいの」と云そ其甲斐嵐吹燈火よりも果無て(從)ナフ輝若の顔
今一度見たい逢たい早ふ顔見せて」と聞より母ハ絶兼輝若の殘置たる
小太刀をば抜手よ縋る妹のお露(露)母様何で死しやんす(是)オ、左様ぢや
女房自害ハ何の爲何故死ふと云事ア(ヒ)ナラ情あい是が死ずよ居れふか
聞バ聞程繫る縁血ハ分ね共義理の姉輝若殿ハ惣領(主)夫共知ず虚々と
敵の手へ渡したハ母が不覺何と存命へ居れふ」と歎をお智惠が聞取て
(從)何輝若ハ敵の手へと云聲此世の限十を重じ富士の雪消て果無成
みけり。我強き父も身を分し姉が別れ又取亂せバ妻も妹も正体無呀と

計よ泣沈む斯る歎の折社有先走りの徒士の者(土)薬屋是濟ハ此宅ア真
柴筑前守久吉直談の旨有て只今是ヘと土ヌ頭を跪踞ふ此方も驚く貴
人の入來死骸を傍ヌ片付させ手銃卓爾と待間程無對の行列狹箱紋ハ
五三の桐の墓若黨近習が一様ヨ乗物徐々と昇据たり是濟ハ頓て出迎
ひ(是)見苦此茅屋未だ承まハリ及バざる眞柴筑前守様是濟が名を聞
及れ渉直談とハ如何成御用(東)其不審道理あり夫ヘ參つて對面せふ」
ニ扉を開かせ歩み出るハ此下東吉上衣服大小も偵がス眞柴筑前と
改名したる其勿体東ヤア者共残らず下つて歸るを待早往くと追立
る姿ハ實も越王の曾稽山の錦の袖悔りせしが諾も無徐々店ヌ大箕踞
東吉額を土ヌ摺付(東)久しふし松下嘉平次之綱殿先ハ涉勇健の体を拜
し懲悅よ存奉つる」と平伏有バ突然睨付(是)素僕の大騙め頬を上い古昔
の松下が此丸腰此手銃見宜物か眼を開いて篤と見よ、儕憎いやツア

女房娘此手錠を打せしれ那奴が所業昔の草履攔だ東吉能見て置(七)エ
お前よ幾世の難儀を懸たへ那男かへ、憎い東吉め」と云てへ見たが美
々しい出世仔細有んと口籠是(イイゲ)下主奴が立身せし逆ひからかし入
來様ハ、身又錦繡を飾ても非道の榮花へ浮る雲此主ハ斯の如く温袍
を肩又結ルでも心ハ涼しき羅綾の衣改め云よへ及ねど八年以前志貴
の城主松永大膳へ招かれ出世の有付身の廻を拵ヘ料小次兵衛が方よ
り貢金六兩借用し軍用又宜き具足調へ來れとやせしかバアイヤ當代ハ桶
側ハ用ず胴丸とゆて左の脇よて結合せ伸縮自由よひを求んと吐し六
兩を掠め取再び歸らぬ横道者其六兩より利を盛て日々の催促當所の代
官へ小次兵衛が願ひよ任せ此の如く手を錠受しも僭故何とせん腹立
や」と老の齶又血の涙東吉漸々額を上(東)傍立腹の段々一々上るよ詞
無併金子を掠取たるハ旦那の指圖で渉座ります(是)ナ、何と金盜だる指

圖とハ(東)アハ、涉失念どしあんいあ常々軍書涉講釋の次手ヤイ東吉譽バ臣下の身として主君の命よ背ても立身する社侍ひたる身の譽と云尤も君臣の禮義よハ違ふ共武ぶを逞たごましく國家を治さむるが則ち勇士の本意たりとの涉教訓此東吉めが膽きもよ徹てつし一旦命よ背きても已おのれやれ立身して日蔭の主人を取立隱かくれたる名を世よ顯あらはさんと不圖心付たる方カタ涉目を掠かすめし黃金こねごんハ天あめより我よ賜物たまものと押戴おしき當時小田信長社名將の聞え有バ一先主從の約あくをあし此度當所へ立たち越しも松永が一類亡ほろほさん爲遠州とおしまへも兩三度罷まかり越しにへ共國遠とおとおん有て涉在所ざいじょも知ざるよ不思議よ今日代官所しろよお出障子しやうじを隔へだて涉顔を見奉つりし其嬉うれし役人わくじんよゆ付手錠ててきようを緩ゆるく打替うちかへしも恩おんを謝しゃする我寸志何卒いにしがれ古いのちへの誤り涉赦免めんくだ下され小田の家の軍術ぐんじゆ涉師範しじはん共成玉たまハらば某ほんましが本望ほねのう信長しのぶが大慶偏たいけいへんよ願奉ねがひつる」と低頭平身恭々ひそだしおなづく詞ことを盡つくしやさる、世を拗あね者の松下ひだ何思なにひげん立上たんじょうり簾筈たんすの引出叶ひきだしぬ手

に探て取出す一通ハ東吉が昔の手形(是)奉公人請狀の事文言ハ讀よ及
ばず請判親判汝(なんぢ)が判(はんぐ)寸々よ引裂捨(是)主從の名ハ是迄今ハ真柴筑前守
久吉殿見らるゝ通齡も早耳順よ及び耄(おひき)らほふ我體命の内に頼入度其
仔細率先是へと座を下れバ妻も娘も(ヒ)ハテ發と手を突敬ふ禮義よも怯
ず憶せず偃仰(ひつひやう)く上座に通る寛仁大度威有て猛き其骨病忽ち詞を引
替て(東)ナフ嘉平次殿彌々小田家の淨師範(じよしはん)お客分の有付ハ久吉宣く吹舉
致さん(是)イヤ志(こころ)ざしハ祝着せしが最前もヤセシ通大膳(とほり)へ合体ハした
れ共反逆(ほんぎやく)の光有松永(かる)を見より遠州を立退此所に身を隠す中案の如く
舊思(きうおん)の主君を殺せし大惡人未對面ハせざれ共連判(れんぱん)又入たる我名乘貴
邊(へん)ハ又小田の家臣敵(ごき)と敵との參會善惡の返答致す夫迄(かのる)ハ見苦く其次
に入て淨休息(じゆうきゆ)お露(ろ)ノ案内(あい)せよ(露)諾(あい)の返事も尻輕(しりがる)に(露)率(いさ)マ那方(ながれ)へと
待遇(めいど)よ(東)然(さら)バ後刻(ごこく)と立上(とう)手錠(てあがり)も嫗(まご)や窮屈(きうくつ)と取捨(とりすて)
く案内(あい)よ連て

一間に入玉ふ。妻へ始終を(七)ナフ。是濟殿元の名へ嘉平次殿機嫌が直つて
嬉しい」と云。ぞ諾も思案顔硯引寄筆追取様子へ何か白紙に老の達筆都度
くよ(露)アイ合點で渉座んす」と立出る娘のお露父が前より手を突て(露)心
宜らぬ松永よ仕ず共小田の家へお勧やせと吳々のお頼母様も俱々よ
と云を押へて(是)モウ宣々ヨリヤ此書た物渡バナ返事よハ及バぬ」と手よ渡し
(是)お七ハ床よ飾て有箱を一所に(七)アイくく二人ハ奥へ門口へ小次兵衛
がいつこかも(小)ナア親父其手錠ハ誰が赦した代官へ云ふたらバ笠の臺
がヤ笠の臺より此方の代金新作めが好機事仕居たげなサク早ふ請取
か」と毎々よりもばいやり笑顔金箱擔け新作が(新)ナラ小次兵衛殿此方の
宿で算用せふと徃く所よ早爰へ付き込だ」と云ひつゝ動許千兩箱(新)ナ
證文を引き替(小)ナ、合点」と懷ろ探せば(是)ナラぬく新作其金よ手を
懸な(新)ナセお前の涉難儀を是(イ)渡す金ハ外よ有(新)ナ外よ有とハドレ何處

よ(是)ゞ爰は」と云つ、落たる以前の小太刀腹へ一發突立たり是へと驚く小次兵衛より新作が周章聲(新)て死でぢやく」と呼るよ(ヒ)ゞと駆出女房娘(匕)是へ何事悲や」と縋り歎けバ息を次(是)女房泣あか露も歎き新作何蹠々爰へ來。其方が訴人した輝若へあ我が爲よハ孫ぢやハやい(新)、(是)ゞ悔りハ道理(理)呵るので無其方よハ禮を云のぢやハやいア可^カ愛やあア主を主と思へバ社心を盡した先刻の小判我や奥の間で泣て計り居たハいやい孫共知^チ訴人したも主の難儀を救へん爲殊にか露が志ざしあぜ得心をして遣ぬかヒ許して女夫^{めう}仕や」と云れてか露が悲い中又恥しき親の前顔真赤よ新作が禮の詞よ痛入(新勿体無事)浮仰らずとあせ存命て下さりませぬ我親ハ境みて松江新左衛門逆刃の鞘師二親も無一本立浮奉公よ參つてよりお志ざしを請乍ら得心を致さぬハ貧い暮のか主様侮^あつてア那様^あ慮外をすると云れん

ハ不奉公と存ずるから只何事も能様よしやうみか指圖次第(是)、其正直じやうぢきを知た
故臨終いまはの際きはの遺言ゆゐごんアヨナフ小次兵衛ごひやゑ逆そぞくも助たすらぬ我命がめい息有中いのちあつあるうち
の上うへを懺悔さんげせん一間いちまの内成久吉殿なつきよしだいも始終しりゅうの様子ようすを聞て給元來さしあげ某もしハ
大内義隆の先祖せんそ大明琳聖太子だいみんりんじやうたいしの末葉ばつはに仕つかし宗設そうせつと云し唐人其頃明朝
ハ肅宗じゅくそうの嘉靖かせい二年朝鮮じょうせんの降烈王國境こうれきおうこくぎやうの争あらそひより軍起ぐんきつて大明ハ打負
たり其怨おさなだを報むくハん爲日本よ渡わたり聖琳太子せいりんたいしの末あれバ周防の國主太宰
大貳だいに義隆に身みを寄よせよせ再び朝鮮じょうせんを切取きりそらん計略けいりやくも陶全姜とうぜんきょうが惡逆おきよよて義隆も
既すでに最期さいごの砌かざり我われを招まねき頼まわせし義隆斯落命かくらめいよ及ぶ汝なまハ東國とうこくへ立越能
大將だいじょうを見立せんたつ存念ぞんねんを達たつせよと我よ與へし先祖せんその裝束箱しゃうぞくばこも納おさめて是迄そこまでも祝
ひ祭まつまつる今月今日北辰尊星ほくしんそんじやうと崇あがむるハ則ち太子たいしの涉筐かたが涉命めいにち日の今月只今
年來ねんらいの望はしそこし端少かたごハ叶かなふ心こころの悦よろこび軍法けいりやくも計畧けいりやくも誰なに劣きらぬ嘉平次かへいじが漸やうく
和中散わちさんの調合てうがふよて人の病いはハ癒いやせ共なほ直ただらぬ物ものハ貧ひんの病いは一旦たん松永まつながへ一味

の某し一合一戦の扶持へ受ね共合体せし血判の血を血で灌ぐ此切腹
斯成上へ松永への義理も是迄孫が手柄へ此太刀突貫いたる有様を不
便と思ふてお吳やれと障子の方を打見やる息も無堪物語皆く道理と
介抱の中に瘞ぬ火車が(小)親父唐人の寢言陳腐漢聞に來ぬ我や代
官へ一走りぞりや往てふと駆出る後の障子の内よりも(東)加藤虎之
助正清引止よと聞るよ(軍)發と答て立出る以前の代官十河軍平
小次兵衛呆て(小)如何ぢやと口を明たる奥の方障子開いて悠々立
出る其姿武の靈冠の唐冠。白袍。又紫色の差貫少捲手に一角獸の持笏弓
手。持しへ松永が書て遣たる頼の一紙を携へ四方も輝く有様に手負
い發と痛手を忘れ思はず知す親子主從頭も自然と下りける小次兵衛
がけでん顔(小)何奴ぢやと思ふたりや東吉の猿冠者な殊勝出世をひろ
いだ」と立寄を八打と睨付(東)古主の有家を尋ん爲正清を松永へ入込せ

し所則ち當所の代官勤るを幸ひ松下の住居も早速知る汝法よ過たる
訴訟あれ共旅懸の願ひと云今へ赦す新作とやらんが志ざし其箱渠め
よ得させよ」と仰の下より正清が千兩箱を指寄る(小)忝じけあい否最
金さへ受取や出入無と箱引携立出る(東)待々小次兵衛松下が借用
ハ相濟だが此久吉が請取物置て行(小)外又置て往ぬ覺へ(東)や無と
ハ云さぬ汝某しを猿冠者と吐した昔或ハ子守或ハ菜摘水汲で支度解
無姿を見て云た事覚えつらん一合でも扶持取て見よ十石取バ首を遣
んとソレ首賭せしを忘たか今ハ小田家に仕へる久吉儕が首の百二百鷹
匠が引犬の飼食よも足ね共番し詞反古又成てハ政道立ぬ殊更正清を
軍平と名乗せ大膳が方へ入置事も氣取た奴生て返すな正清」と仰を聞
より膝戰慄(小)堀らぬと逆行(軍)とつこいさせぬと引戻し手玉よ突
て足下よ踏へ首よ手を掛曳や云已が自滅と白縫の手柄も斯や舌三寸

無益の賭へせぬ事あり、久吉欣然と袖搔合せ(東)物數成ぬ某しよ一大事
の御頼又高麗渡海の勘合の印玉へる上此裝束を着するハ則ち貴殿の
義心請繼印此後武邊を忠義よ磨き唐高麗よ攻入て義隆の先祖の仇櫻
下殿の忠節立所よ凱歌よ上んハ此久吉が方寸の内有と約束堅き石
の帶威風凜々鳴渡る朝鮮國の征伐ハ此約諾と知れたり久吉重て(東)達
れ成古主の忠死餓別祝ふ物有と詞の下より正清が(軍)乗物是へと昇据
させ手を引出るハ(是)ア輝若か」と悦ぶ祖父妻も娘も嬉さよ姉の亡骸搔
て出(若)ア乳母ハ爰よぢやと云聲頓て走り寄(若)ア乳母ハ死よやつたか
坊も死ふと取付て泣ハ真身の親子の別れ久吉傍へ下立て(久)此子が肌
の守の中よ慶壽院の手跡よて委い事ハ皆知たり侍従と云ハお智惠殿
で有たよる手鹽よ懸た稚馴染と目み涙泣輝若を搔抱き昔し忘れぬ子
守歌泣あ此子よ寐々轉ろ母様ハ何處へ往た稚を見捨て死出の山泣あ

な無か親子の衆(東)一旦足利の養子と成だ此輝若實父三好存保の忠死
と云種と云ふ智惠の腹を假初に嘉平次殿の初の孫旁々以て縁有ハ此
久吉が子受て我惣領久次丸と名を改め家よ繼木の子を大事育上たり
姥櫻花の都の高臺寺み衣冠の姿残されしも斯る秀句の謂れとかや。何
時の間よかへ新作が髻り透許押切て(新)忠臣二君よ仕へあと數へ玉ひ
し松下殿冥度の供へ此黒髮姿へ此儘孫君のむ傍離ぬむ伽役父へ鞘師
の名人よそろりと抜てそろりと差我もそろりと髪切て鞘師の家名
を残す爲今から曾呂制と召ませと心も口も輕口咄(軍)お伽よハ能坊主
なり出來たくと悦ぶ正清(軍)お潔よき思義の心底此上ハ若君の介抱
と松下殿の死後の跡能よ納る祠堂金千兩箱を曾呂利よ渡(軍)我名も元
の軍平よて大膳よ近寄ん率涉立と勧れバ(是)く旁々先待れよ常々當所
よ住居を占風景を樂む内見え渡浦山を高麗の地理帝都よ摸擬置女房

娘むすめの指圖しゆずと從つれてひ莎羅サラと明る襖ひみつの向むかの山さん是いは西にしの海面うみ一面いつよ指
差方さしほうを見玉みだまへと云いふ人々ひとびと伸上のびあがり見る目の下したよ三韓さんかんの(東)地理とうりの案内あんないへ
如何いかよく(是然さらばし那西なにし)の切きどと淡路たんじゆ播磨はりまの國境こくごうひ九國くにを過すぎて壹岐いき
對馬つしま釜かま山さん海かい迄まで四十八里よんじゅうはり是いは高麗たかくらの港みなとありあ(露)ご父ちち様さま其その様ようよ身みを揉なで玄くろやん
すがお笑止せうしあ見續つづたる此浦このうらの氣色けしき計けいりを(七しち)夫め此母このおも此里このさとよ住す馴なれ
たれば住吉すみよしの浦行舟うらぎりふよ海松かいざんかるかる北きたへ摩那まなが獄神戸ごくじんに繫つなく松浦舟まつらうら
思おもひ合あわすれせばせすかいより砾川ごろがわ迄までの大河おほがあり舟ふねを引ひバ馬ま筏いか馬まよ馴なれ
たる高麗人たかくらじん日本勢にっぽんせいハ刀との得物とくもの大手おおての戰たたかハ弓ゆみ鉄炮てつぱう火矢ひやを飛として戰たたか
へば今見みる沖おきの帆掛舟ほりかけふね三葉みはの鉢矢そやを射ひる如ごとく眞まこと一文字ひとじよ駆破かげやぶらば平ひら
安堂あんどうの後うしろなるかぐあみめはじき搦手からめて又不意ふいを討うれて叫さけびと阿母須あはす時とき
よ遜にげのほ登のるらん（軍）、扱いは潔ひきよき教おきへかある其時そのときよ正清まさきよが先陣せんじんを受う判官ばんくわん
殿どのの武略ぶりやくを以ひて鶴越つるこしの逆落さかおちし鐵拐てつくわが峰みね一ひとの谷手柄ほせも一二いちにの譽ほまれれを取と

ん(東)さ、頼母しや加藤正清勇義經智ハ楠三韓を一撃ぎ切耳切首鬪時を
蔚山が嶽よ登られよ」と勧ム勇ム虎之助千里よ其名鬼上官と怖恐るゝ
も道理あり。松下が安堵の思ひ久吉ハ喜悅の眉(東)只今賜ハる勘合の印
ハ天子の寶なり。松下殿の松の字の造ハ則ち公の君よ捧ぐる天下の眉
目此久吉が悦びよ今日よりも此里を天下茶屋村と呼聞及ぶ良雲の茶
の湯の餘情是より南に茶殿を構ヘ往來の人よ一吸の茶を施すが追善
供養(新)オ夫こそ曾呂利が頭役お露が情汲替す和ぐ中の薬の奇特末世
よ弘まる出世の門玄關下馬先大鳥毛供先崩ヘ乗物よ法の門出を見捨
るも弓矢取る身の禮あり義あり妻と娘が介抱に見送る古主が三世の
縁(若)爺よ(是孫)よと夕露の別れよ暫久次丸(若親父様去バ)と幼氣よ哀別
離苦を目前よ振捨行や行列の跡よ手を振虎之助千騎よ一騎百萬騎納
まる浮代よ天下茶屋古跡を残し出て行

○浮世風呂の場

賑にぎへ敷しき都壽樂の町中に浮世風呂迎むかれあさ後家の老舗じたせよ寄り集こもふ客
 へ浴衣ゆかたの風呂上うり獻さいつ酬おさへつ酒事の間まを中居なかゐが三味線の調子に乘の
 獅子舞し、まほしありやしたよ／＼よい君の大杯蓋おほさかづきで又詰オツせくだる／＼
 も吃挨拶ごちあいさつの口癖くちばの風呂好ぞうと社こそ知しられたり。折柄突然上あがつて出でる忠次ゆうじが浴衣ゆかた
 引掛かたがけて忠ゆう新五丹藏しんごたんざうお身立よひたての能時のうじよ上あがつて仕合しはせ扱つか今驚さざわらとふ温ぬる
 るく成なつてコレ見みや戰慄がたくふるふ位くわいぬぢや氣味きみが悪いいと囁つぶやく所ところへ此家このいえの主人
 五德ごとくの詰つみ勝手こうとう口から走はしり出で(詰つみ)忠次様ゆうじやうお呵しかり成なれままよ何なんよある
 い湯ゆが温ぬるんだも風呂焚ふろひの久七くしちが内うちよ居まわぬから幾人いくたう有あても氣きの付つくぬ女めの
 共とも攬らんき廻まわして今いまの間まよ立たさせますマア其間酒あいがつでも渉渉飲おて下さりませ(新)
 忠次ゆうじハ格別かつべつ我わハ今迄まことに酒さけも呑のだりや一寸いちづつ蕎麥そばを徃そて見みよかへ(丹たん)夫お
 々ふおりや猶好かほすなりや早く行ゆたいコレ詰つみ言ことてやりや／＼(詰つみ)サアそりや遂と

今も参りますが蕎麥と風呂へ喰合せぢや坐りませぬか(忠)^シ譯も無
夫へせつと昔の事さ今時蕎麥を喰て風呂へ入ねば粹の内へ入ぬべ
あ早くく」と急^{いそが}せて打連奥に入けれバ跡よ詰^{つめ}が喚聲^(詰)女共く一
人へ蕎麥屋へ隨分早と言て來^こ汝等へ何心得て居^ゐる那方方へ見通
り潤々と捌^{さばけ}たお侍ひ尻持立て氣^きよ入バ汝等相應^{さうおう}よ徳^{のぶ}が行^はるよ妾^{わらわ}や風
呂屋の事猶以てお蔭^{かげ}で段々温^{だんぐ}まる懲知^{よそしら}ぬ律義者^{りちぎもの}ハ阿房^{あはう}の唐名^{からな}と云て
ノ小磯^{こいそ}が姿を見よ何^{なん}さしてもアベくとかい志^{おも}よの無癖^{むへき}よ年中文彌
節^{よしき}聞た様^{よう}あ吼頬^{ほのづら}見るも五月蠅^{さざばか}計りで内の爲にハ一ツも成^なん^{テモ}遊^ゆばし
ちや置ぬ何處^{どこ}も居る呼で來^こ(女)イヤ今^{さき}の先久七殿と水汲^いよ往^くれました(詰)
是^ハ扱^{さそ}妾^{おれ}が往^く共^{とも}喧^け附^{つけ}ぬよめんよう那^あの男の傍^{そば}へ寄^よたがる憎^{にく}てらしい
女郎ぢやあア斯^か云^{いふ}中もお客が大事ぢや^し皆奥へ詰掛^{つめかけ}て隨分^{すゑぶん}浮機^{うき}嫌取^{うけ}
てたもエ、切々失^{きりく}ふ」と尻張^{しりぱり}あ狼聲^{おほかなごゑ}よ囁付^{かみつけ}乳^{うなづけ}(女)アイ^くと走り行^ゆ跡^{あと}へ又

出風呂上りでツくり肥りし侍ひの主の馴染の十河軍平詰(ホウモウ) 最お上り成さつたか扱へお前も湯が温さよ(軍)イヤイ 今ずんと能入加減(背中)ナカミテてお吳やれ詰(ホウモウ) 拭(ホウモウ) 上(ホウモウ) ま志よ(共軍)ソレク 七九よ炎(ホウモウ) が有(詰)アイ 夫りや心得て拭(ホウモウ) 扱(ホウモウ) もお前(ホウモウ) の驚(キヤウ) とい肥り肉此お尻の大きい事(ホウモウ) の(裏)夫(ホウモウ) でもお身程(ホウモウ) 有生(ホウモウ) 其所(ホウモウ) 拭(ホウモウ) と最能(ホウモウ) 扱お身(ホウモウ) 年み似合(ホウモウ) 赤色の氣が有のふ詰(ホウモウ) 滋座りませい(ホウモウ) 今人の望む色取の最中で滋座りませ(軍)ハシマサ 其色(ホウモウ) 付て咄(ホウモウ) 事が有能(ホウモウ) 滋聞きやれ是の下女小磯と云へ身が主人松永大膳殿の心懸られし狩野の雪姫(ホウモウ) 極(ホウモウ) たわバ何卒欺(ホウモウ) し賺(ホウモウ) して主人が滋座る金閣の館(タチ) 連れ行バ身も手柄和女(ホウモウ) 褒美を貰ふ事ぢやナシト其工面(ホウモウ) 出來(ホウモウ) か詰(ホウモウ) 夫あれバ幸ひアマ小磯(ホウモウ) 下男の久七と滅多よ中が能(ホウモウ) 何でも懇篤(ホウモウ) 居様あ素振(ホウモウ) ありや妾(ホウモウ) 爲に大きな邪魔(ホウモウ) 何(ホウモウ) 欺(ホウモウ) して大膳様へ遣りましたら其跡でハ久七を

方の聟^{もぞ}として可愛^{がり}ます(軍)。夫ハ兩爲能様^{よいやう}と計^{はから}ひめさ」と云間も素^{わざ}。
へ歩行來る深網笠着た侍ひが掛行燈見て立止り何か家來に云付れば
はツと簽て門口より(家)軍平殿ハ是^{みか}あ詰成程爰^こよ涉座ります」と詰
詰が挨拶する中に軍平手早く浴衣^{ゆかた}を脱^{ぬき}着る間よ表の侍ひ網笠取
て内^{いり}入^{いり}(東)聞及んだ浮世風呂我^{わが}も望みと打通れバ詰ハ氣の毒^詰
ヤ折角^{せつかく}お出成れても今日ハ留風呂でムリ升^の(侍)ア然バ手前次風呂が醜
し度^詰イヤ夫共^{とも}よ奥の^お客^きよ問ねバ成ぬ暫^{しばら}くお待^まと云拾^ひて障子^{ひさし}引立^{たて}
されば互^{たがひ}々四邊見廻して近く指寄聲^{さしより}を竊^{ひそ}め(東)兼て汝^なを大膳^{おおぜん}が味方^{めがた}
じて入^{いり}込^こせ置^{おき}しハ此久吉^{ひさよし}も相圖^{あひづ}して僞^お引入^びん計略^{けりやく}館の内^い仔細^{ささい}ある
バ先達^{さきだつ}て驅催^{かりもよ}したる蜂塚嘉六跡邊大炊^{おほの}櫛田隼人^{から}隼人^{はや}を始として其外諸國
の軍勢^{ぐんせい}を引卒^{ひんそつ}し金閣^{おもむ}へ赴^{おもむ}かん様子^{いか}如何^{いか}と有けれど(軍)サレメ敵^{かたを}大膳^{おおぜん}某^{それが}
を加藤虎之助^{やまととらのすけ}と存せず心^{こころ}を緩^{ゆる}しひへバ館の案内^{もんない}ハ勿論^{もろろん}萬事^{まんじ}よ氣^き

付見る所不審きへ彼の二重目の閣宿直と思しき者有て』と半分聞て(東)夫こそハ疑ひもあき慶壽院隱し置たよ極つたり然有バ迂濶よ寄られず先達て云合し通り某しも味方と偽り入込ん汝宜敷計ふ可(軍)成程此方よも手筈萬事其仕度して相待ヤさん涉心安かるべし』と謀合久吉ハ別れて徐々歸らるゝ跡へお誥が立出て(誥)拝明んく何程云ても次風呂ハ成ぬと仰やる今のお侍ハ(軍)イヤモツ夫や待兼て往あ玄やつたが小磯が事ハ(誥)せつろしい夫や急事ハ涉座りませぬ水汲に往て未戻らず傍前が何程雪姫ぢやと仰ッても篤りと見届けねバ(軍)イヤ夫には及バぬ慥あ事身ハ此町の會所よ待て居やすから歎て那方へ連て涉來やれ(誥)夫なら左様(軍合点か)と手具合固て軍平が出て行後を見送るお誥ハ下女を呼出し(誥)風呂の下ハ何ぢや能か此又久七や女郎さいば何を仕て居此方やホシニ今朝から鬧がしさよ鉄漿染る間が無つた雜筒櫓

紅楊枝レアヤシ又竈の育カガミ穂カスぬ様カタチ鉄漿エツヤウも一杯持テハシマツて來キマツル早急アラシキと來キマツルい」と云
聲ナニカも巽タツカ上アガり又抱ハグり急遽シキ走ハシマツり入ハシマツルよける浮事ウキモノも世ヨリは有時イマツコトハ徒タタツらと聞ヒムクし
も今ナウハ身カラの上アゲよ思スルひ積ムカシりし雪姫シロヒメハ妹ムツガ脊割カミハラフあき直信カミハラフと俱シモみ賤シヤウしき宮仕ミヤツカヘ
手馴ハカルぬ業ハラフよ汲水ハラフの片荷カタハの擔桶タケを差荷サシハひ道草カミハラフ咄ハガし瘋ボラカ々カタカタと崩ハラフハぬ肩カタハを厭イソ
ひ合ハマハ漸ヤハク々内ナカニに立歸ハシマツルるお誥ハガハ見るより楊枝投捨ハガスル(誥ハガ)ヤ小磯カミハラフの横着者カタハラフ此親
方カタハが云ハナシ附ハタハタもせぬよ何故ハナゼ久七カタハが片相手カタハタハタハタよ成ハタハタハタハタて居ハタハタハタハタる久七カタハも又不潔ハタハタハタハタい幾人ハタハタハタハタ
も有女郎ハタハタハタハタ共ハタハタハタハタを連ハタハタハタハタて行ハタハタハタハタいハタハタハタハタ那ハタハタハタハタ小磯カミハラフめと往ハタハタハタハタたが勃然ハタハタハタハタするハハタハタハタハタ斯ハタハタハタハタハ云物ハタハタハタハタ
其カタハ方が業ハタハタハタハタぢや有ハタハタハタハタまハタハタハタハタい皆ハタハタハタハタ汝ハタハタハタハタれが仕掛ハタハタハタハタ居ハタハタハタハタ徒ハタハタハタハタら女郎ハタハタハタハタめ面憎ハタハタハタハタやハタハタハタハタと筈追ハタハタハタハタ取振ハタハタハタハタ上ハタハタハタハタ
れバ久七カタハ縋ハタハタハタハタつてハタハタハタハタ(七)コレハタハタハタハタまアハタハタハタハタ湯ハタハタハタハタ堪ハタハタハタハタ忍ハタハタハタハタ成ハタハタハタハタませ何時ハタハタハタハタもお林ハタハタハタハタやお夏ハタハタハタハタ
を片相手ハタハタハタハタよ頼ハタハタハタハタめ共ハタハタハタハタ今日ハタハタハタハタハ大分ハタハタハタハタ鬧ハタハタハタハタしさふハタハタハタハタよ有ハタハタハタハタた故ハタハタハタハタ那人ハタハタハタハタを頼ハタハタハタハタんだハ私が
不調法ハタハタハタハタモウハタハタハタハタ然辻ハタハタハタハタハ誤ハタハタハタハタり入ハタハタハタハタまハタハタハタハタして山ハタハタハタハタりますハタハタハタハタと揉手ハタハタハタハタをすれば打莞爾ハタハタハタハタ(詰ハタハタハタハタホウ)

那奴ハタハタハタハタが仕方ハタハタハタハタハ憎ハタハタハタハタけれど最愛ハタハタハタハタい其カタハ方ハタハタハタハタの謝言ハタハタハタハタ了簡ハタハタハタハタせいで何ハタハタハタハタとせふハタハタハタハタ(七)ハア其

様、よ傍機嫌が直れば私も嬉しいが今の謝言と仰しやつたは詫の事で
傍座りますかへ(詰)サア然言バ折角付た此口紅が脱るハいの(七)何にも詫
の紅のと云バ上下の唇が打合から夫や脱る道理かい(詰)サア其唇を一向
開てわツばさツばと腹立て云たりや此口が喰喫かろと氣が付て妾や
恥しこうヤ往掃除して來」と云つゝ跡を振返る尻目よ鹽の舌甘き形振無
理よほんぢやり風搔繕ろふて入みける。跡打詠め雪姫の指寄て小聲よ
成り(雪)知ての通り盜まれし家の秘書是を證據よ敵を討ふと思へ共今
又於て在所知ず免角ふ前が頼力と成て討せて給」と云を制して(七)高い
く其儀ハ我も油斷あく様々心懸れども斯宮仕の身あれば思ふよ任
せず然乍ら日頃信する佛神の加護有ば終ハ本望遂るで有氣遣ひ有あ
と云間も中居が走り出(中)久七殿奥のお客が此方よ頼事が有呼で來
と仰しやるハいの(七)オイ夫や何の事ぢやな(中)何ぢやか往て聞しやれ

「一寸」と奥の間へ引立行バ納戸よりお詰ハ立出俄ニ詞改ためて(詰)
ニレヤ様子ハ残らず聞まし大膳とやらが心を懸在所を探す雪姫様此
處ニ傍座つてハ危い幸ひ伏見の墨染ムハ知己の者が有程ニ其處
ヘお前を預ましよ(雪)ナフ夫ハいかい心遣ひ頼母い事乍ら知ぬ處ニ妾一
人居も異物逆もの事久七殿を(詰)サク那とお前が譯有様子も今聞
たが連立てハ人目ニ立跡から密と遣ませうテ「一寸ソレ駕籠爰ヘ」と呼
出せバ雪姫何の氣も付ず(雪)夫なら跡から隨分早ふ頼「」と言つ、駕
籠ニ乘移ればお詰三人ニ囁いて手早く駕籠ニ網を掛け
時しも奥より聲高ニ我が頼んだ「」我ぢや「」と久七を取卷て風呂
場へ立出(三人)何ぢや三人共受込で返事ハ何とぢや云聞ふ(七)返事
と云て皆十方旦那衆何方を如何共ナされぬが小磯が戀を叶へる心ハ
是で傍座ります」と竿ニ掛たる染手拭ひ追取て(七)此通り三筋ながら

摸様ちがハ違ふ片身恨うららみの無様なむやうよお前方三人乍あつらノ風呂ふろへ入はいるさつて此手拭ひひを戸戸の間あいだから出して傍座そぞくれバ小儀ごぎよ何なにあと引ひせまするスシヤ引合ひきあつ
 たお方が女房めいぼうよ成れりや外ほかよ微塵みぢんも云分いぶんハ有あまい眞まことの其處そこが惠方果報えいぱうかう
 (三)人ひと何なによもくこりや面白い夫め成此方ならてとハ風呂ふろへ入り小儀ごぎを呼よんで引
 せよせよと云いつゝ裸體はだかよ越中えちゅう禪ぜんし頭環あたまくるりと引包いはんみ件くだんの手拭ひひ引提ひきあげて皆みな
 這入れば久七くしちハ小儀ごぎを尋たずねて莽もろうと那方ならて此方ならて探さがす其處そこへ戻もどるお誥ごく
 (誥)ゴレ男おとこ如何いかぢやいの常つね々此目顔まなざしで知しせ詞ことの端はしよも警けいい程てい云いぞ氣きの付
 ぬ顔し仕しやる故遍べん々駄羅理だらりと延のびる程思おもひが増ますして何なにも成ならぬ今日けハ是
 非共夫ともでにする仇あだ恫どよ慾よくあ」と手てを取とバ(七)アイタア、些爪ちづを取としやれませ誥ごく、
 仰山あおさんあ何なにの是ぜが憎にくふて握いざなりよか返事しりつ仕遣つかまよや何迄いつまでも離はなさぬく
 コレナア離はなしやせぬ(七)サア、私わハ合点あてんぢやが飄ひよんな事ことハ風呂ふろ入はいるお侍さむらいひが三
 人乍あつらお前まへ又惣ほれてぢや(誥)アア夫めよ私わが情夫まよ上じようよ成なたら夫社めぐらし最さい皆みな

業わかじて如何あ仇しよも知れません其處で斯ぢや片身恨の無様に
私も一所よ風呂へ入て皆染手拭ひを出して置ます其中端を絞つたの
が私がのぢやによつて夫をか前が引成りや皆も得心此方も塲晴て情
夫又成る其處が彼阿彌陀坊の淨瑠理に有縁引の段ぢやスリヤコレ私ハ新羅
丸か前ハ又玉世の姫様ぢやハいのナシ乞いか智惠かくく(話)智惠の段ぢ
やあい妾や嬉ふてく何處も彼も戰慄くくくするハいの(七)サ
夫あら風呂へ入ますアヘ(話)サ妾も其間ヌ髪飾著るハいのと鏡臺取出
す其隙ヌ久七手拭ひ戸ヌ挿み傍ヌ忍び窺ふ共知ぬお誥ハ鏡ヌ向ひ油
盪りと撫付る額の皺が黒めかバ真拭で足ぬ鍋炭を滑著くと塗掛る
顔ハ白壁鑊あしに手塗の竈見如く厚皮引張身嗜み巾つ拭つする中に
風呂の戸透しく叩くよア(詰)サ合點ぢやと裾引上て直然寄り見れば連
理と并べたる染手拭の達摸様左の端ハ花色ヌ一枚形の石疊み堅い心

の物好へ懐み石原新五様次へ曙の白上より雀を付たへ忠次様此方へ楓の龍田川韓紅めを染たる赤ら顔の丹藏様此絞こそ我殿涉結の神の勝利生と引張手答三人ソリヤ今ぢやと風呂の戸瓢と引明れバ群々ばッと立上る湯氣みよかるゝ三人の中よ赤頬丹藏が手拭ひ引合お詰が恂り三人ハ猶興醒顔三人ソリヤ何ぢやくと呆果たる計りあり詰イヤ三人様久七ハ其所よ居ませあんだか三人ソリヤ何の爰よ居ういの小磯ハ其所よ居ぬかと皆立出れバ詰ソリヤ居ぬ筈那ハ彼お尋の雪姫よ極つたりや只今駕籠よ乗大膳様へ遣りましと聞より直信飛で出七ソリヤ遣て能物か取返さんとかけ行をぞつこい遣ぬと引戻し丹ヤ雪姫をかばふかられ紛れも無狩野の助大膳公の云付で引立より來れ共面眞を見知らぬ故白癡を盡した其替り繩掛て手柄よするサア來いと飛掛る腕首掴んで下手よ入引擔いて頭轉倒新ソリヤ捕たハと兩人が左右よ掛るを振拂ひ弓

手よ轉り馬手よ發矢と打付れば勃然と起て摑合お誥ハ周章(誥)久七
負まい肩持ア妾が加勢と捕追取り頭へすッぱりびっしやく摑き廻
つて支るを後蹴よ蹴飛し踏飛し互よ摑む髻鬟二人相手よ直信が力及
ばず負色よ瘞む所を付込んで押伏撓伏手拭ひ取て小手縛り屈々と縮
上れべお誥ハ悲しく(誥)コレハ夫ハ餘り胴懲あ未一夜も寐ぬ戀男大事の
聟ありや何程でも遣りやしませぬ手よ掛て寧一ヶよ縛つて行や放
ちハ遣じと駆寄て取付引付加勢よ成る(丹)鳥婆々め面倒あ」と丹藏が引
摑み撃と打込風呂の中(誥)悲しやと叫ぶ聲跡ハ聞捨直信を引立てこ
そ(三重)歸りけり

○金閣寺の場

抑々金閣寺やハ鹿苑院の相國義滿公の山亭三重の高樓造庭よハ八ツ
の致景を移し夜泊の石岸下の水瀧の流れも春深く柳櫻を植交て今ぞ

都の錦ある松永大膳久秀舊恩の主君を亡し剩ざへ慶壽院を擒みし此
金閣より籠置遊興より月も日も立や彌生の天罰より寛怠有間の榮花あり
喜藤太相手より圍碁の二番續て勝の濱(松)喜藤太又負たよあ白の源氏源
の義輝を四ツ目殺しよした松永中より我より續くまいと自慢黑白石片
付闇へ報知の鳴子の綱引バ波落々立出る石原新吾乾丹藏川島忠次
大膳が前より手を突バ(松)さ呼出すハ餘の儀であり究竟頂より抑込た慶壽
院此天井の一枚板其裏より雲龍を描せよと望む故其龍ハ誰よ畫せ
んと間へバ狩野之助直信か雪姫成でないと云然より仍て我達云付兩
人を召捕直信めよ云付けば四の五の吐す雪姫も同じ様よ何どやら勘
酌兎角慶壽院が機嫌を取も心より一物有ての事雪姫も手より入て抱て寐
る我分別那魔よ成る直信めハ軍平より云付誥牢へ打込んだ三人の者共
慶壽院が警固隨分と怠るな」と云バ喜藤太(喜)皆聞たか雪姫を抱て寐る

ハ聞悉たがアソ義輝や慶覺を産だ慶壽院何所よ見込が有て那の様よし
て置るゝア此喜藤太が兄貴あら引縊つて存分よ」と云バ大膳(松)、何
を若輩者の知事でアい短く云バ彼王陵が母を擒同然慶覺始め諸國の
武士蜂の如く起てもむざと我よ敵對させぬ思案信長よもせよ此閣よ
押寄なバ一番よ慶壽院を櫛の板よ縊り上此劍を咽よ差付一思ひ去年
五月室町落城の其後猫子が一匹得手ざしせぬハ彼奴を人質よ捕た故
さ三人乍ら彌々油斷仕るあ早く参れ』ハト皆々詞を崩ヘ(皆)道理成る傍計
略中々油斷ハ仕つらず唯今打たハ時計の七ツ番代よ参らんと打迎閣
へ登りける大膳盤を押遣て(松)ア喜藤太残念あハ淺倉義景信長が計略
よ乗て亡された後直様追駆一合戦ど思へ共軍を預けん軍師なし無念
乍ら此閣よ引籠り適れ能武士もがあと望む折から此下東吉と云者信
長が手を離れ浪人し我よ奉公を望む由心得ずとい思へ共軍平が云ヌ

任せ信長謀計を以て東吉を指越バ此方も謀計より乘て召抱へいへと勧
むる故軍平を迎へよ遣たが未歸らぬか成程イヤモ万事抜目あき軍革隙の
入へ彼の東吉同道致す又極つたり其間より一杯喰ふ藝者共を相手よ」と
間の障子を押明れば藝子法師が取巻て諫める中より雪姫が夫の牢舎の
苦しみを引替妻ハ綾錦布團幾重か其上より涙凋れたる有様ハ王昭君が
胡地の花色香失ふ風情あり、大膳近く立寄て(松語牢)との品を換へ舞調
せて奔走するも慶壽院が指圖した天井より墨繪の龍直信より替つて描か
但し抱れて寐る所存か何ぢやくと責られて姫ハ漸々顔を上(雪思ひ
も寄らぬ傍難題繪の事ハ祖父様より家より傳はる事成バ何しよ辭退ハ
やさね共水草花鳥より事變り墨繪の龍ハ家の秘密雪舟様より父將監迄
傳りしが何者の所爲より父を手より掛け其上より家の秘書迄失へば何を
手本より可き其儀ハ免して下さりませ同じ事を云様あれど直信殿

と妾中なまこへお前も知て坐んす通りか主様の心情で夫婦と成つた義理
有れば譬たとへ此身を刻まれても不義ふぎの女の嗜たがむ事妾わらわし計りか夫迄牢舍らうしゃ
とハ情なや斯る憂目うきめを見せんより寧殺いづそぞうして下さんせ」と岸波カマクラと伏て泣なき
居たる(松)喜藤太アレキ聞たか慶壽院ヨウスウイニが望みの通り云付れバ家の秘書ひじよが無ない
と云夫あら枕まくらの伽さカミふと否いな直信め又義理詮索胸せんさくが惡あらい所詮邪魔じょせんじやま
成る直信め軍平が戻り次第岩下がんかの井戸へ釣下し殺して仕牛しうへバ跡が
爽快夫共よ直信を殺しとも無か應と云て雲龍うんりゆうを描ありと抱れて寐な
りと其方が得心次第生いぶさふと殺さふと篤りと思案して能返答よの聞迄はる
布團ふとんの上の極樂責藝者共張はり上あて唄うたへ「」と諫いさめても姫ひめハ兔角うさぎの諾の
へ涙なみだより外無りける斯る處へ十河軍平伴ともふ此下東吉とうきちが幹元かんげんよ抜刀指ぬきがたなさ
付く入來れバ此方も障子しようじを織おりの大膳だいぜん(松)ア軍平其手込うちこハ何事なに(軍)さ
んこれ是社下東吉渉奉公のぞを望み推參すゐざんハ致せ共若過もしやまちも有あんかと油斷ゆだん

致さぬ此仕合(松)、家を望む東吉何の用心免せ／＼の詞よ隨ひ刀を
鞘よ納れバ(松)、聞及ぶ東吉よあ苦しふない直然参れ「身も信長より手
を置つるよ其信長を見限り大膳よ仕んとハ珍重／＼ソレ腰が明て見苦
しい刀を免して近ふ／＼と詞の下家來よ持せし指添刀渡せバ取て偵
の東吉兩手を支へ謹んで(東)渉覽の如く四尺又足ぬ此下東吉甲州山本
勘助よ競べてハ拔群劣りし小男か馬の口か秣の役か恐れ乍ら渉譜代
共思召下されあば有難くひと身を謹謙り躊躇(松)、古ヘ齊の晏子と云
者身丈ハ三尺なれ共諸侯の上よ立て國政を執行ふ武士ハ魂ひ人相の
差別善惡に寄るべきか然ハ云人よハ一つの癖の有者とハ慈鎮が歎此
松永も碁を好が一ツの癖相手ハ是成喜藤太軍平ヤ幸ひ目見えの東吉
試みよ何と一番打ふかい是へ／＼と盤引寄招く頤お髭の塵(東)取敢ず
お相手」と盤よ向も先手後手(軍)軍平是で見物」と腰打掛て指窺ふ隔の障

子徐々と人間を忍ぶ雪姫が心一つの物案じ(雪)囚はれたを幸ひよお恩
を受た慶壽院様奪ひ返さふか夫の命も助たして何があ」と指俯向千々
よ心を碎くへ碁立大膳へ先手の石打や現の勝の山薦の細道此下が關
飛よ入込だも松永を討て取る岡目八日軍平が助言と知ぬ大膳が詞も
有と打點頭(雪寧此身を打任枕替そと終一言云たら最愛い直信様牢舎
を助けて吳もせふと云憎い那大膳何と枕が替されふ否と云たら夫
の命(松)危險事の大膳が石が巴の事(東)ア否も死へ此白石何やら遁れ鰐
の魚白き方よへ目が無ふて有か無かの辻占を聞も濁々胸撫下し(雪)眞
よ昔の常盤の前夫の敵清盛よ沈并し例も有夫ハ子故妻よ子迎ハ無れ
共大切ある主の爲指當るハ夫の命然ぢやくと立上り慄ふ膝節松永
が後よ竦々立寄て(雪)先程の渉返事をヤくと手を突き碁又打傾く顔
をも上ず(松)覗へ誰ぢや(雪)ア(あな)妻しで山り升先程のお返事を(松)、雪姫が

顔の白石返事とひア嬉しい抱れて宿石の返事ぢやあ(雪)アイ(松)惟とひ好機
昨今の東吉が見前懲り曲者免せく(東)ア是へ痛入たる御挨拶主と成
家來と成ぞ基の勝負よハ遠慮へ致ぬ軍平殿(軍)何よも左様女房よ征と
御膳でムる大膳様(松)アサ^バ晩^{ばん}スヘ一目斯押て(東)此東吉が點^かを入て(松)面
白信長でも直信でも切て仕廻へバ徒目も殘ぬ^{のこ}い喜何様左様」と藤太
が助言松軍平切々切て仕舞と基癖の詞發と駆出十河軍平姫^が驚き(雪)
アヨレ待た切とハ誰を(軍)ア知た事狩野の直信(雪)ア待て下さんせ夫を殺
まい爲に大膳様のお意よ隨ふ心で爰へ來ても基よ打入て傍座る故指
扣て居ハハのふ^ア待て下さんせ(松)何ぢや身が意に隨ふ(雪)アイ(松)夫りや
眞實か餘り急いで呑込ねど軍平待基よ勝てハ傍邊り姫が來やら危険
ハ狩野の助ハ、喃東吉彼太平記よ記た天竺波羅那國の大王先此如や基
ス打入て過^{あやま}つて沙門を殺た引事夫ハ因果是ハ眼前雪姫^{ゴヤ}意みさへ隨

へバ直信へ助んと番し詞反古よも成まい暮んを待て闇の坏盡抱て寐た其上で直信へ免て吳ふと云よ少ひ落付思ひ大膳盤を打詠め(松)大方此基も己が勝勝負を付て見様かい(東)然ば左様と東吉が(東)向ふ敵へ小田信長(松)此大膳が後陣の備へ(東)續く基勢ハ(松)有共く有馬山伊那の箇原足突あ突いたら大事が取てくより(東)取どひ吉左右天下取」國を取る薯蕷汁薯蕷から饅とへ早い出世の奴ら(軍)三五十八南無三寶大膳様がお負ぢや」と石拾ふ間も短氣の松永盤を擗で打付るを透さぬ東吉扇の應對莞爾と笑ひ(東)都て基ハ勝んと打んより負まじと打が基經の捉東吉が癖として圍碁よ限らず口論或は戦場よ向ても後れを取事大嫌ひ盤上ハ時の興勝可基を態と負るハ追從輕薄負腹の投打あら今一勝負遊べされんや何番でも傍相手」と井目据たる東吉が手段も無と知れたり、大膳も納得し(松)面白い碁の譬見掛よ寄ぬ丈夫の魂ひ頼し、

誠よ武士の肝要ハ軍の駆付其駆引ニハ智謀が第一汝が才智を試みん
又ハ何をがな」と思案の内傍より碁笥を追取て目的ハ岩下の井戸の中
ざんぶと投込(松)如何ミ東吉今打込だ碁笥の器手を濡さず取て得さ
す工夫や有かくと猶豫もなく庭より下り立金筒翻漲る瀧の流を直ミ
井の内へ暫時よ汲取早業ハ井桁を越して水の上浮めて取たる件の碁
笥有合盤を打返し(東)四ツの足の真中より据たる碁笥ハ信長が首を引提
此如く首實檢の其時の用意又用ゆる碁盤の裏四ツの足を四星又象り
軍神の備とし小田を亡す血祭」と盤を片手より指上しハ下邳の土橋に石
賓が背を捧げし張良も斯ヤと計り勇し(松)仕たりく」と松永兄弟軍
平も舌を巻(軍)斯程才智を備し東吉涉手より入社吉左右目出度先々一問
よ渉入有て渉酒宴もや」と勧れば(松)何よもく適れ頓智彌々軍師よ頼
みの杯盡喜藤太軍平案内せよ」と命する詞より兩人が伴ひ奥より入みけり、

跡見送つて大膳が(松)サア是からハ雪姫ム闇を見せふ」と手を探しが(松)イナ
く抱て寝ぬ先今一色終施々と墨繪の龍井より出來れバ能コレサのぞ
た大膳次手ヨ望を叶へて給是さくと寄添ヘバ(雪)サアヤお心ム隨ふ上
知てさへ居る事成ら何しよ筆を惜せふ先よもヤた秘密の書終よ見
ぬ自ら手本無でハ何迄も(松)ム道理と點頭しが提たる一腰取直し(松)然
バ手本が出た上でハ否とハ云さぬ合点か(雪)ア成程く雪舟が残され
た手本でさへ有成バ只今でも書ませふお前よ手本が(松)有共く率先
此方ヘと松永ハ姫を伴ひ庭より下り件の一腰拔放し瀧よ映せばあら不
思議や落来る水よ龍の形現然怪む雪姫が扱ひと計り目を放さず又も
映せば生るが如き雨を起すや俱利加羅龍隱せば隱る、希代の劔手
持乍ら松永も奇異の思ひを成みける姫ハ透さず身繕ひ守り詰たる大
膳が刀奪ひ取篤ど見(雪)ホ、初社尋ねる俱利加羅丸親の敵大膳遣ぬ」と切

掛くる搔潛つて遙か又投退(松)心得ぬ我を親の敵とへ何を證據」と云
せも立ず(雪)、其證據とへ此劍祖父の雪舟唐土より持歸り家又傳へし
俱判加羅丸朝日又映せバ不動の尊体夕日又向へバ龍の形俱利加羅不
動の奇特を以て斯ハ号し此名劍父雪村まで傳たりしが河内國慈眼
寺山灌頂が瀧の本よて父を討たれ刀も紛失然れども俱利加羅丸と云
上名を包み家の秘書が見えぬくと云觸せしも誠に此劍を見出さふ
計り姉様と諸共に心を碎だいた父の敵今と云ふ今劍の不思議さ見る
上へ敵も此方又極はまつたサ尋常よ勝負仕や」と又た切り掛くる劍を
振取り(松)、びくしやくと躍廻るな年來天下を轉覆す望み有て三種
の神寶を假よ拂へんと思ふ折節如何にも灌頂が瀧の邊よ於て此刀を
水よ映し龍の形を顯し見る老人一人我も其場へ行掛り天晴能名作
名劍武士の守護よ成べき物と只管よ所望すれ共承引せざる奇怪世人

知らず討放した扱ひ其時討捨てた老人の雪姫和女が親將監雪村で有たよ
す年月の無念も嘸々此劍が欲いか某しが首も欲からず先立た姉花橘
が追善雪姫が志操よ面じ討れて遣たいがア成ぬ義輝さへ打殺し天下
へ元來王位をも望む大膳匹夫連れが敵杯とへ小賢しい女めと立蹴ふ
八打と踏飛し足下み踏へる折社有(喜)喜藤太是ヌと直然寄姫を引立後
手み縛り搦むる背後へ卓然此下東吉(東)ハッス様ある事も有んかと見隠れ
よ窺ふ處傍主人を狙ふ女何故細首を討召れぬ東吉がお目見み乞清潔
云して傍覽み入んと刀抜手を止める松永(松)待々東吉我思ふ仔細有れ
ば無成敗へさせぬく軍平参れと呼出し(松是や其方よ預けた直信め
シ舟岡山へ引出し五ツの鐘を相圖一分試しよ試して仕まへ(軍)ツ然ら
ばう雪姫も一所よ引立可か(松)ア否く左様の成まい(軍)よ又何故で
渉座ります松何故とへ不粹ナ喜藤太ア那轉られた姿を見よ雨を帶た

る海棠桃李櫻が幹に縊り着苦痛を見た其上で抱て寐るか成敗するか
二ツ一ツハマ後程軍平ハ早く「と追立遣大膳ハ上見ぬ驚欣然と席
を改ため松^{コリヤ}喜藤太其方^{そのはぢ}よハ此劍屹度預ける慶壽院が警固忘惰り
あく云附よナ東吉汝やア女が首討んとな、新参乍ら某しを護ふ心底
満足^{まんぞく}今より彌々我軍師小田が家よて千貫取らバ二千貫一万石で
も望み次第戀の囮^{まきり}の其女^{そのむすめ}縊し^{くび}上^{あげ}て憂辛を見せよ(東)ハ畏^{かしこ}まつた^たと東
吉藤太引立^く櫻が枝縛るも主命主從が打連奥^{うつ}入相の鐘も霞^{かすみ}又埋
もれて心細くも只一人無懸成^{しゆうせい}かあ雪姫ハ何を科^{とが}迎撃^{むか}れし夫も最早最
期かと思へバ徹^{そよ}と吹風も咄嗟^{あほや}夫^かと見上^あれば花の散^{ちる}さへ恨ある今^か
生死の奥座敷諷^{よじのうち}ふ調子も身に^か染歌^{しみたな}花を雪^かと詠^はむる空^み散^ば花
を雪^かと讀^ひ命も花^かと散懸る狩野助直信が最期も五ツ限^{かぎり}と軍平^{ひま}追立
られ屠所^{としょ}の羊^{ひつじ}歩行兼^{あひみ}不^{かねだ}夫婦が顔^{かほ}と顔^{かほ}雪^{ゆき}ナ是^ハ我夫^{わがつま}か直^(直)雪姫^かと

寄んとすれバ繩取が引張繩の強ければ見替す計り涙聲直斯様成ふ
ハ思ひも寄ずる主様を奪返し舅の敵も俱々よ尋ん物と思ひしよ無慙
死る口惜さ何卒和女ハ存命て慶壽院の傍先途を見届くる様ニ頼
むがや(雪)ナフ其お頼ハ皆逆様科も無身を刃に懸跡に残つて何とせん一
所よ行度死度と叫ぶを軍平嘲笑ひ(軍)ア、不可女の腕立から狩野の助を
殺すと云其身も繩目の憂面恥未も頼みハ大膳様其器量よ鬱惚て傍不
便が懸て有何卒最一度詫言して抱れて寐がましで有々不便ヤと夕間
暮追立く引れ行見送る身さへ揺れて往も行れず伸上り見遣バ誘ふ
風み連れ野寺の鐘の更々と響きよ散や櫻花梢も萎れ身も凋れ凋れぬ
物ハ涙ある稍泣入し目を開き(雪)ア那鐘ハ六ツか初夜か夫の命が有中
よホシヨ夫よ未言残した直信様哺父の敵ハ大膳ぢやはいなふ、此事が知
せ度此繩解て欲いあアモ切ぬか解ぬかと身を急る程締搦む煩惱の犬

我と我身を苦しむる憂思ひ(雪)那大膳の鬼よ蛇よ人よ報いが有物か
 無物か喰付ても此恨み晴さいで置ふか」と悔の涙破落／＼玉散露
 の如くなり(雪)夫よく三井寺の頼豪法師一念の鼠と成牙を以て經文
 を喰裂恨を晴せし例も有る此身此儘鼠共虎狼み共成て給南無天道様
 佛様やし／＼拜み度ても手が叶へぬ、無念口惜や」と踊り上り飛上
 り天よ呼へり地よ伏て正肺涙よ暮けるが(雪)誠よ思ひ出せし事社有自
 らが祖父の雪舟様備中の國井の山の寶福寺よて僧とあり學文へし玉
 ハず兎に角繪を好み玉ふ故師の僧是を禁止んと堂の柱よ眞此様に縛
 り付て折檻せしが終日苦しむ涙を點じ足を以て板椽よ畫く鼠繩を喰
 切助けしとや妾も血筋を受繼で筆へ先祖よ劣る共一念力へ劣らじと
 足よて花を搔寄／＼搔集め筆ハ無共爪先を筆の代り墨ハ涙の濃薄櫻
 足に狂せて書とだよ繪ハ一心よ寄物凄くすは／＼動くハ風か有ぬか

花を毛色の白鼠忽地爰よ顯れ出繩目の葛草の根を月日の鼠が喰切
くち機會ばつたり倒しが勃然と起(雪)ア嬉しや繩が切たか解けたか足
で鼠を書たのが喰切て吳たかと見遣バ傍よ散花の鼠の行衛も嵐吹木
の葉と俱よ散失たり。姫ハ夢の心地も覺(雪)嬉しやく本望やと悦ぶ足
も地よ付す夫の命を助けんと駆行後へ弟喜藤太(喜)とつこいさせぬと
首筋攔で引戻す放せ遣じと追合中發矢と打たる手裏剣よ藤太が息ハ
絶にけり是ハと驚愕を見返る所へ(東)ナム雪姫暫しと止腹巻よ身を堅
固懸々と立てる筑前守久吉(東)何事も最前より窺ひ知れたる始終の様子
先祖の雪舟渡唐の時明帝よ望まれて天満宮の渡唐の神像畫く稱美よ
取替えし俱利加羅丸ハ是爰よと藤太が死骸の一腰を取て渡せバ篤と
見(雪)、成程く家の秘藏の此劍祖父様が唐土でお揃成れた渡唐の天
神今日本に弘まつたも雪舟様が始ぢやと父様の物語り此名劍が手よ

入柄いりからへ乞踏いてふんづん込で大膳おおぜんををと駆入かけいりを押止め(東)一途ひとよ逃はなるはなの道理みち乍あらナナアサ
 バ渠かずへ天下の敵親てきおやの敵かたきへ又重かさねて慶壽院けいじゅいんの傍身わがみの上此久吉ひさよしが受取うけとた軍
 平ひらムナ付直信いのちの命めいの上些うちこ少すこも氣遣きづかひ無なれ共何角なにかの様子ようすを知しす爲ため一刻
 も早く舟岡ふなおかへと聞きよ心こころも浮立計うきたつ計はいかり(雪)其そのあらか主ぬしを頼たのむへと劍つるぎを腰こし
 習引つまひき上あが小褶保羅こまほら花はなの浪舟岡山なみふなおかへと走はしり行ゆく既すでによ其夜そよの月代つきじろも傾かたむ
 運命うんめい松永まつながが熟醉じゆくざいの折好きりよしと指足拔足さしあしぬき慶壽院けいじゅいんの傍座所わがみじゆう究竟頂きくきょうとうの高樓たかのうと
 見あらる空そらに赫かく々たる星ほしの光ひかりりへあら不審ふしん(東時とうじ)へ今春いまの末春すゑへ木きあり
 青陽せいようの東ひがしよ當あつて木曜星壽命冢ひようせいじゅめいそうよ建たてるす時ときへと、忠臣君ちゅうしんぐんみ代しろと云いふ天あまの
 吉瑞きつざい目出度だいど二重ふたじゆの樓ろうよへ楷子かげこを引ひて宿直しゆぢが物音ものごゑ仕濟しまさしたりと見
 回まわす廣庭ひろば櫻さくらの枝えだ是い幸さいはひの架橋かけばしうと取付つけ登のぼるむさびの木木傳つたふ猿猴ましら苦蒸こけむす
 枝梢えだこの花はなが又雪ちらく吹ふき雪ゆきと怪あやしむ計うくり漸よ々よと高欄たからんに手てを掛かたる額がほ
 浩音洞こうおんどうの様側ようそくへ翻ほんと飛と込途端はさまよ連雨戸障子れんうどしようじへ破倒はたたくくく(三人)ス

狼籍者忍びし「切及廻せば真柴久吉(東)ア狼籍とい寛怠あり慶壽院の
迎ひの者尋常よ渡せばよし異儀及バ「片端目よ物見せん」と突立た
り(丹)レ物あ云せ乍生捕」と(丹)捕たと懸る丹藏が十手振手を衣被ぎ右へ
墮許投越バ弓手み掛る新五が肥肋蹴上る早速川島忠治(忠)ヨリヤさせぬハ
と後抱後矢筈よ縊來を沈で前ヘ(軍)ヨリヤく投る體よ眞顛倒微塵よ成て
死てけり。一度み懲ぬ石原新五向様を襟縊み睨と取此方も押て揉合中
乾が尾を振巾刃物後より切付る東まつかせ合點と石原を二ツよ梨割
味方打刀抜取丹藏が首ハ遙よ飛散たり(東)扱々無益の隙入と見遣三重
段階子跨る桶の一枚板登れば上る樓閣ハ究竟頂よ設の構ヘ今少身
の上ありと慶壽院ハ覺悟の体小袖の鎧を恭々敷釋迦觀世の三尊佛口
よ稱名一心不亂脇目も振ふ在す傍前よ頭を下(東)小田信長が家臣真柴
久吉傍迎ひ参上せり心靜かよ傍用意と云よ念佛を止め給ひ(慶)ナニ信

長の迎ひとへ良くも來りし嬉しさよ然乍ら斯も敵の擒ど成何日迄命惜むべき未來佛果を得させよ」と涉目を閉て合掌し再び仰せハ無りける(東)云申斐無涉所存哉信長が諫より慶覺公よも還俗有義昭公と諱を改め足利の家を起さんと軍勢催促最中あり此閣外よハ某しが一味の武士涉迎よ満々たり乞涉安否を知せんと腰よ付たる備用急合圖の狼烟取出し立明しの灯を移せば叔南塘が火龍炮焰々と燃上り雲間よ轡翻入と等く合圖の太鼓合せの蟻吹立く(三重)打鳴し數千の挑燈曳々ト聲天地よ響き動搖せり慶壽院も安堵の思ひ久吉涉手を取參らせ鑼を小脇み段々椅子二重の樓よ下り立て心よ點頭即坐の氣轉鑼を直よ渉着背渉身を鎮に忍ぶ竹天より橋を吳竹の梢は玄いわり浮波く其身ハ元の桜木よ取付下る筐蟹の雲の舉動最危き庭よ折來十河軍平狩野の直信雪姫も立歸り涉母君の涉安体悅びヤセバ涉目よ涙慶雲龍

を描せよと二人の者を呼寄しも大膳を欺いて奪び返せし家の旗慶覺
よ傳させ潔よく死んもの」と語玉へべ十河の手を突(軍某し軍平)とハ假
の名誠(まこと)久吉の郎黨加藤正清斯程(かほぜいさりかこむ)大勢取圍(おほぜいさりかこむ)よ折合ぬ大膳目覺しさせ
んと駆寄て一間の障子蹴放せば四方四ツ手(よつて)み鐵の網力士の如く眞中
よ卓然と立たる松永大膳(松キア)信長が計略斯有んと察せし故豫ての要
害油斷(がいゆうだん)ハせじ(東)何(なな)さく七重八重(ななやあね)又網(あみ)を張共(はるとも)我見る目(め)みに童(わらわ)賺(まんまな)し蟋(きりすかご)籠(かご)よ劣(ひど)た巧(こう)み踏漬(ふみづぶ)し首(くび)取(とり)ハ易(やす)かりつれ共(とも)信長が指圖(さしお)よ寄(よせ)て慶壽院(けいじゅいん)を奪(だつ)はん計(かみ)り義昭(ぎしょう)公(こう)よ傍(そば)馬(ま)を進め汝(ななが)が本城(ほんじょう)志貴(しき)よ向(むか)つて攻(せめ)寄(よせ)ん(松キア)面(おも)白(しら)し我(わ)本城(ほんじょう)よ攻(せめ)來(きた)らバ叡山法師(えいざんぽうし)を相談(あひかなひはなし)合(あつ)華(けいわ)々(よつよつ)數(かず)軍(ぐん)せん(東)云(いふ)よ及(およ)ぶと睨(のぞ)み合(あが)ひ互(たがひ)よ肱(ひび)を春(はる)の風(かぜ)東(ひがし)風(かぜ)吹(ふ)風(かぜ)よ飄(ひるが)よ輝(かがや)く袖袂(そでたもと)供(そなへ)奉(さなへ)せる真柴(まなぎ)ハ大鷗(たいよう)の万里(ははうつ)よ羽(は)拂(きさ)朝(あさ)嵐(きり)し正清(まさきよ)直(ただ)信(しん)雪(ゆき)姫(ひめ)が再び手(て)よ入(いり)俱利加羅(くりから)九(く)影(かげ)を映(うつ)すや其(き)奇(き)特(だつ)瀧(たき)ハ今(いま)より龍門(りゆうもん)の名(な)を万天(まんてん)

よ鳴響く爰へ都の金閣寺庭の櫻の春懸て詠めを残し歸りける

○志貴山の塲

敵の本城志貴山の銳氣を挫く義昭將軍麓の野迄發向有バ取敢ずも小田信長烏帽子素袍の禮美の袖悠々と床几に掛りか在れば從つて明智光秀狩野助直信左右の芝又扈從り信長諸軍よ向へせ玉ひ(信)此度真柴が計畧よて小袖の鎧二ツ引兩の旗傍母公慶壽院迄傍安康よて取返し我本城へ送り越たる莫大の勳功其上此志貴山の城廊へ馬を進め華々歎勝負一時に決せんと詞を番つて歸りし由將軍にハ傍出陣夫故斯も發向す所思ひも寄ぬ亂舞の体如何成事か訝し」と仰の圖又乘明智光秀(光淺倉退治又鼻明し何があ當る詞の端察する所久吉が大功を鼻又懸我ハ顔の遊興らん幕へ傍入して傍用意勧玉ハれと勢ひ立れバ直信押止直斯此所へ出陣有も皆久吉の懸引成バ定て深き計策成ん」と舌も引

えぬ其所へ幕押切せ義昭公鳥帽子裝束欣然と信長又向へせ玉ひ昭慶
壽院を奪ひ返し十四代の家の旗再び四方よ震々せ我に天下を知せん
といそも頗ひ有らん」と涉感の詞主従の禮義の程社感じけれ軍帥真
柴久吉ハ白木の臺より恭々しく掲げ乘たる舞扇威儀繕ふて臺差置(東)添
あくも義昭君敵の不意を討ん爲態と優美の翫そび殊より身を祝の
か能手自加茂の舞扇今日の軍の間出と利運の壽く末廣がり賞美の
賜物あり」と相述る信長退去て中啓よ受持押戴(信)涉手自の舞扇かさ
仰祝すれば取も直らず目出度前表斯も有ふか歌二本手より入今日
の壽きサア久吉此付句聞まほし率々君を壽けの「詞よッ感じ入(東)」
の涉秀句則ち君を祝ひの爲斯様みて如何有らん歌「舞つるゝ八千代
を傳ふ扇よて(信)よ面白しく歌「舞つるゝ八千世を傳ふ扇にて二本手
よ入今日の壽き、當意即妙言語よ絶せり是も則れぢ長久の涉代萬歳」

と臺ぶく折柄小田家の郎黨柴田權六陣口よ馬乗り放し柴仰よ任せ城
中の案内万事を窺ふ所近江源氏の一族よ心を合せ山法師を談合近國
の野武士を集め既よ勝負の時近く相見やひ故早速注進仕つる早く渉
用意然るべし」と云へ捨て、社引き返へす、久吉明智よ向ひ(東淺倉退治
の返禮よ貴殿よ大手を頼みや攻め口固め高名有某しハ君に付添
敵に油斷の不意を討ん(信道)々久吉君よ付添ペ信長後陣の固を成ん光
秀ハ直様大手へ早急ふれの詞よ連三ツよ別て光秀が家の片鎧館玉の
鋒先を研ぐや磨き合ふ軍慮の程こそ(三重)類ひあき又た朝へ返へる春
の夜の闇ハ綾あし志貴の山名よ高々と無い光山路を照す有様ハ何方
夕日と疑へる明智よ大手を攻伏られ身ハ濡鷺の松永大膳生駒の麓へ
遠近の立足弱き軍兵共松永制して(松)ナカム者原此無も術の裏待伏有ん
と見せ懸させ此上道の闇許へ勢を揃て某しを陷井とは甘い手段モ少

も急事あい幸ひの此篇春の夜寒を「凌ぎ」と用意の床几に掛る天罰向
る葉武者ハ夏の虫傍への柴を折薰く陽火の光立勝れバ山も劈く閑
の聲乱調よ響くと等しく岬陰岩間狹間よ顯れ出し士卒の面々案よ相
違の松永大膳弱みを見せじと聲張上(松)ヤ憎き葉武者の敵對だてど皆
殺せ」の下知より早く右往左往入乱れ喚叫んで〔三重戦〕ひしが數千の
大軍松永が軍兵大半討取て残を遣じと追捲る大膳小高き岩根よ突立
松(ヤア)東吉の猿智恵奴め見參せよ」と呼ハつたり〔正合点〕と虎之助飛鳥の
翔も勇の大音〔正〕主人久吉の計略みて篇と見せしハ儕等が露命を繫
く兵糧あり斯火を以て焼捨てたハ膝元よ付添居軍平が恩送り仇で報す
る受取と聞も敢ず強氣の荒身抜手も見せず無二無三心得血氣よ無刀
の應撃運の極めか松永が白刃の尖鋒岩又當つて折飛だり(松)來い組
ん〔正〕合点と根唾を流し力競と揉合しが神の赦さぬ所よや正清上よ

乘掛り足下より一發踏付しハ土地も志貴の多門天の邪鬼を隨へ給ふ
姿も斯や大膳が兵糧を焼れたる印ハ今よ焼米の米の尾山と名よ高し。
義昭公を真先よ引添出たる軍師久吉明智直信從ひ出(東)ヤアく正清先將
軍を弑し奉つりし大罪人末の代迄も見懲よ磔刑けの刑罪紀せ(正)ハッ正
清飛懸り兩足攔んで引提ずれバ(直)舅の敵と狩野介膽先貫ぬく鋒先の
苦痛義昭君ハ(昭)兄の仇家の仇を」と松永が元首搔切搔落し怨敵退治太
平樂悦び勇む足利のニッ引兩鎧ひ旗寛然に靡く竹の色榮え榮ふる榮
花の門幾千代懸て祝ひける

寶曆四年丑臘月編成

祇園祭禮信仰記 終

明治廿六年九月十九日印刷
明治廿六年九月廿二日發行

發行者兼
內藤加我

日本橋區通四丁目四番地

印刷者
瀧川三代太郎

日本橋區新和泉町壹番地

發兌
金櫻堂

記仰信禮祭園祇

印刷所
今古堂活版所

日本橋區新和泉町壹番地

